
俺の世界崩壊の日は

風来竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の世界崩壊の日は

【Nコード】

N1090N

【作者名】

風来竜

【あらすじ】

いたって平凡。それが座右の銘。何をするのにもやる気が起きない、興味が湧かない、面倒くさがり。の三拍子は『小澤修平』そんな平凡で平行線の世界を跡形もなくぶち壊したのは、これまた非現実なほど綺麗な美少女。しかも彼女は異世界から来た魔法使いだという。一体、これから俺の世界はどうなっていくんだ？ドタバタ学園ファンタジー。

第一話「ある晴れた日のこと」

今日は晴れた。それはもう雲ひとつないとても気持ちの良い晴天である。暑すぎず、寒すぎない今日の気温は、日本人のほとんどの人が好む気温だろう。無論、俺もその中に入る人種だ。

さて、こんな気持ち良い晴れの日であるのだが、ひとつだけ気に入らないことがある。このわけのわからない妙な胸騒ぎはなんだろうか？俺の胸騒ぎがある日は、これまで何度もあったがけっして良いことは起こらない。

6歳の頃、夏休みにお祭りで楽しむために正月のお年玉から、必死になって貯めたお小遣いを、犬の散歩中に落として無くす。

中学2年生の頃、体育祭の選抜リレーに何故か立候補してしまい、これまた何故にかクラスの連中に期待の眼差しを向けられ、いやいやではあるが、ガラにもなく1ヶ月近く前から真面目にスタートダッシュ、バトンタッチ、スタミナ強化などの練習を必死にやった。のだが、それも空しく当日は雨天中止となった。

中学3年生の頃、前々から希望していた有名私立高校に進学するため次のテストは全教科高得点をキープするぞ！と激しく意気込み家に帰ればテスト勉強を黙々とし、寝る日々を繰り返していた。が、テスト当日。開始のチャイムと同時に裏にしてあった問題用紙をひっくり返し問題に取り掛かる。1問目がわからず飛ばして2問目、そして2問目もわからず3問目。

……………そこでようやく俺は気づく、あらかた全部の問題に眼を通して見たが、解けそうな問題がほとんどない。そう、俺はやってしまったのだ、今まで毎日勉強していたのは今日のテストの範囲ではないところ。今日のテストには「無意味」という三文字を必死にやっていたのだ。結果はいうまでもなく全滅。

全ての教科の範囲を間違えるというミラクルをこんなところで起こしてしまった俺はシヨックで2日間寝込み、中央榊高校に進学することを担任に伝えた。もちろん今現在通っている、家から徒歩20分で着く偏差値並以下の県立高校であるわけだ。

そういえば考えてみるとその頃くらいからだった、俺がなにをするのにも興味が無くなつていったのは。簡単ににいえば燃えるような熱い闘魂魂！というのが薄くなってしまったのだ。「頑張る」という言葉が俺の辞書に存在しなくなったという言い方のほうが正しいかもしれない。

「は……はつくしよんっ！」

なんの前触れもなしのくしゃみ。これは本当にやばいかもしれないな、なんの前触れもないのにあんな大きなくしゃみがでるなんてまあ、なんかの前触れがないとくしゃみをしてはいけないのか否かは知ったことではないが。ますます胸騒ぎ心配率は高まっていくばかりだ。

そんなことを考えつつも俺はいつもの通りT字路を右に曲がり突き当たったところにある駄菓子屋の近くにある自動販売機でジュースを買おうとする。

「おっと………」

100円玉を落としてしまった、それもナイスな具合に俺の腕がギリギリ届かない位に離れた隙間という悲劇的だ。まさかこれが俺の妙な胸騒ぎの答えか？いやいや今回の胸騒ぎはこんなもんじゃない！もつと、そう、なんか大事件に巻き込まれるような、そんな胸騒ぎだ。

なぜそう思うのか全く根拠はないのだが、体中が悲鳴をあげているような気がするんだからしょうがない。まあ、そんなことを考え

ていても何も始まるわけでもないの、いや、決して始まってほしくないのだが……。

キーンコーンカーンコーン……

「んっ！もうそんな時間か！」

いささか考えに没頭しすぎていつもよりも歩くスピードが遅かったみたいだ。遅からず速からずのスピードで歩いていた俺を、チャイムがせかかすようにその音を響き渡らせる。待つてる、絶対後でお前を迎えに行くからなっ！もちろん俺としばしの別れを告げた相手は、光輝く100円である。さて間に合うか？
少し息を切らしながら教室に入る、教師がいないところを見るとギリギリセーフだったみたいだな。

「ようつ！修平にしちゃ今日は遅かったなあ」

窓際の一番後ろにある自分の席に座ったと同時に、朝っぱらからやけにテンションの高い声で俺の肩をポンツと叩く。

「……そういう松岡、お前はやけに今日は早いじゃないか？今日の天気予報で雪が降るって言ってたんだっただか？」

「なんだよお？俺が早く来ちゃ悪いのかあ？なんとなく今日は早く来たかったんさあ」

そりゃ万年遅刻の松岡が俺よりも早く学校に着いているんだ、そう思ってしまうのは当然な答えだろう。それに、なんとなくなどの不可解な理由で何度も雪を降らせてもらってはたまったもんじゃない。

「まあ、それにまあじで嬉しい出来事があつたんだよ!……聞きたいかあつ?」

いや別に興味ない。と言つても無理やり聞かされるだろう。

「どつという理由なんだ?」

「内緒だぜ?実はなあ……」

おい、なに顔を赤くしてるんだ。そして、今気づいたんだが目の前で大の男が頬を紅潮させている姿を見るのは結構不愉快極まりないな。

「……俺の下駄箱に蒼井サクラのラブレターが入っていたのさあ!」

気持ち悪い顔をしこたま赤くしてさらにきもち悪くなったのはしょうがない。ほほう、ラブレター……ね。こいつの口からは一生出てきそうもない言葉が出てきたことは予想外だった。それとどうでもいいことなんだが今時高校生がラブレターってなんかちょっと時代錯誤な雰囲気を感じる手口だと思うのは俺だけか?

それにしても人間つてのは本当に色々な人種がいるんだなと改めて痛感した。松岡だぞ?まあ、良く見なければ顔つきも……まあ、それなりのもんだし。身長だつて人並みより少し上くらいのもんだしな。かなり妥協すればなんとか好青年に見えなくもないだろう。んゝそれでもなんだろうか何かが引っかかるんだよな、松岡のことを好きになつてくれる人がいるとはな。蒼井サクラ、か。その子もだいぶ変わつてる子なんだなあ……

「……つって、あつおいさくらああつっ!?!」

自分でもびっくりするようなメタルも真つ青な声が教室に響く。

「しーっ！おいおいっ！あんまり大きな声出さなってえ！」

今世紀史上最大の半端じゃない驚愕のあまりにいつい大声を出してしまった。そのせいでほんの一瞬の間だけがクラスの人気者気分を視線だけ味わえちゃったじゃないか。そしてだ、目の前には馬面のように鼻の下をゆるませた松岡。

いやいや、落ち着け落ち着け。

「……ああ、蒼井サクラって言ってもあれだろ？同姓同名のそこら辺の蒼井サクラさんだろ？」

俺は、心の動揺を体の中にあるあらゆる軍を総動員させて力で鎮圧し、冷静を装い訂正した。

「そうそう……っておい！どーしてそこら辺の人が俺の下駄箱にラブレターを入れるのさあ！よく聞いてくれいっ！ちゃんと調べてみたらこの学校には蒼井サクラという名前の人はたったの一人！我が中央神高校の一年八組。マドンナサクラちゃんしかいないのだよ。それがどーいう意味かわかったかね？」

いや、全くもってわからん。体中の細胞という細胞が拒否反応を強制的に機動しているのだから全くもってしようがない。それにだ全知全能なる世界を創造したまえた神がそれを運命なのだからしようがないと俺に一生を懸けて説いたところでこの拒否反応、拒絶反応を止めることは無理だろう。うん。そうに決まっている。

「まあ、実物を見ないと話しは始まらないってやつだよなっ！ちよつとまってる……」

そう言い、ごそごそと紺色の制服ズボンに両手で両方のポケットをまさぐる。

「ええ〜つと、ほら、ジャジャツジャーン！これが例のブツだ」

わけのわからない効果音と共に、まるで麻薬を売買している闇のブローカーのようにゆっくりと差し出してくる。俺はその封筒を受^{ラブレターらしきもの}け取る。可愛い封筒にはハート型のシールがかかるうじて封をしていた。一度、開けたため粘着力が薄まってしまったのだらう。俺はそれを軽くこするくらいの力を指に入れて外した。

俺には、人の恋文を見る趣味などこれっぽっちも持っていないし、こんな手紙など見たくない。だいたいこういうものは、受け取った者だけが読むものなんじゃないか？それを全くといって良いくらいの部外者の俺が読む権利なんてない。

と、深く心から思うのだが、早く早く！と眼を輝かせて目の前に突っ立っている男が少しずつ近づいてくる恐怖という力、が俺を動かせた。二つに折られていたそれを、ゆっくりと開いていく。なぜそんなゆっくりに開くかって？万が一、億が一にだ！本当にあの美貌にたぐわぬ可愛い字で書かれていて、最後にその人の一字の誤字もなく「蒼井サクラより」などと書かれていたとしたら、俺は多分一瞬にして人という職業を捨ててヤギへと転職しそれを永遠の闇の中へと放り込むであらう。でも、断って置くがな。俺は、ほとんどの男子同様に蒼井サクラを神のように崇拜しているわけでもないし、ファンクラブに入っているわけでもない（ファンクラブ創設者は言うまでもない、だらう？）。他の子に比べて少し可愛いかな、と思うくらいなものだ。

いや、本当だぞ。

だって俺は、同じ学年であっても一度も話した事さえないんでね。

「ほらっ！早く読んでくれよ！あっ、もちろん口にしないで黙読してくれなっ？」

あえて大声で呼んでやろうか。と思わせてくれるくらいに良い笑顔で言ってくれるじゃないかこの野郎。俺は左右の腕の力を瞬時に開放しようとも思ったが、しぶしぶと手紙を見た。

「わかった。わかったからそれ以上その眼とその顔で近づくんじゃ………これはっ！？」

どういう表現の仕方をすればいいのだろうと考えてみたが、やはりこれしかないだろうという考えにすぐ辿り着いた。次回へと続かせるように、なおかつ期待感を高まらせる表現方法。

そう………衝撃の事実がそこにはあった。

第一話「ある晴れた日のこと」（後書き）

みなさん、こんにちわ。そして、読んでくれたことを心から感謝します。

今回この『俺の世界崩壊の日は』を連載することになりましたが、この小説は昔、他サイトで公開していた奴をほんの少しだけ修正した奴で。所々わけのわからない表現があったりしますが、温かい目で気にしないで読んであげてください。それでは、よろしくお願ひします。

第二話『ラララブレター』

小中学生時代、九年間。クラスこそ全て同じのクラスになるような運命めいたミラクルはなかったが、それでも何度か同じクラスになるということ、席が近くなったというきっかけでそれなりの仲になったりして、一年中一緒に共に過ごしていた。などという青春友情漫画のようなことは決してないが、むしろ望んでないのはわかりきっている俺だが。それでも腐れ縁という言葉ほどじっくりくる言葉はないと断言できるのは、今現在中央榊高校という何のへんぴもない県立高校に必然なのか不必然なのかどうかは知る由もないが、同じ高校に入学しクラスさえも一緒になってしまったという偶然の始末であるからにだ。

まあ、ここまでくれば運命などという非科学的な言葉を使っても良いんじゃないかと思ってしまうたりするのは、全くもって俺の気の緩みから生じた、ただの油断である。

誰がどうして、このような馬鹿丸出しで、腹を空かせた野犬のように女を追回し、最後にやはり痛い目を見るだろうとわかっているのに手をだすような、人間失格の言葉が似合うナンバーワンの男で運命などを感じないといけないんだ。それにだ、昔からほんのささいな事でケンカばかりして、それでいて両思いなのを隠しているような、普通の青年（俺のような）と美少女との定番のラブコメ的なやり取りが始まってもいいんじゃないのか？

「もうっ、今日も遅刻したの!？」「お前には関係ないだろ!」「関係ないって、酷いよ……」「ゴメン、実は俺っ本当はお前のことが」「わたしもあなたのことが」

いや、すまない。今のは失言だった。

まあ、俺が何を言いたいかと言うと、俺の一応幼馴染という部類に悔しくも該当してしまう美少女ではなく、馬と鹿のような男のこ

となんだが。長く一緒にいたということもあつたので、だいぶ知つた気になつていた自分がとも愚かしい。そして、なんで最初にこの答えに辿りつかなかったのか自分が情けない。ついさきほど本当の「ヤツ」に気づいてしまったのだ。改めて実感したと言つても良いだろう。「松岡 圭吾」なる男は正真正銘の想像を遙かに超越した馬鹿だつたことに。

そろそろ先ほどの手紙の内容を知りたいところだと思つので発表していきたいとおもう。おっとやはり効果音は必要かな？松岡の言う、蒼井サクラからのラブレターは、六行の文で成り立つたものだつた。ジャジャーン。

松岡 圭吾様へ

あなたを会いしてます

ほんとうにあいします

けっこうしましよう

放火後、屋上でまっています

蒼井サクラより

なんだろう？この簡潔かつ衝撃的かつ誤字脱字な小学生並の文は。

「どつだつ？全くもってびっくりの内容だろお？まつさかなああの学年の、いや中高（中央榊高校の略）のマドンナが俺と結婚したいって言ってるんだから驚きものさあっ！」

俺はお前の馬鹿さに驚きを超えて哀れみという感情が心から溢れんばかりだ。どうみても男の殴り書きの字で、誤字脱字のパラダイスなこの手紙でそこまで信じれるお前に俺は拍手を送りたい。

「おつ、拍手なんてするなよ！照れるだろお」

お前ほど、騙されやすい生物はこの世に存在しないんじゃないか？本当に顔を赤らめて嬉しそうな顔を見ると涙が出てきそうなもんだ。

「なあ松岡、よく考えてみる。全く一回も話したことないような憧れのマドンナが、いきなりどうして結婚してくださいなんて言うんだ？そんなの奇想天外なドタバタラブコメストーリーにさえ、そうそうないシチュエーションじゃないか」

俺は、最後に哀れみという同情心からこいつをこっちの世界に引き戻そうと試みる

「いやあ、やっぱり屋上には正装で向かったほうが良いのかなあ！」
が、無駄だったようだ。

はあー。みなさんお分かりの通り、さっきの手紙は「蒼井サクラ」からのラブレターなどではありえない。まあ、さっきから黒板の端の方で俺たち二人をちらちら見てクスクスと笑ってる三人組のあいっつらだろう。

俺の視線に気づいたらしくよそよそしく世間話をし始めだす。同じクラスなんだろうが40〜50人近くいるクラス編成のせいか、全くもって記憶の片鱗にさえいないような目立たない、そう、俺に近いキャラだな。うん。

あと、この誤字脱字が明らかにわざとらしくしている所を見ると、ほんのちよつとしたお遊び程度に松岡をからかうものだったのだろう。すぐに、しょうもない悪戯だとばれるようにわざとしたんだろう。だが、松岡の馬鹿レベルはすでに向こう側へと突破しているため、「気づかない」というイレギュラーが発生してしまったわけだな。

あの、三人組も面白半分、後半分ありえないだろうっ!? という気持ちでいっばいだろう。俺もそれに同感だ。

「なあ、松岡。これはたぶん悪戯な手紙だと思うんだが」

心の優しい俺は最後の最後にもう一度助け舟を出してやった。これでも九年間つきあってきた大切なともだ

「ん? あー、あれだな! 一種のひがみってやつかな? 修平くんよ。まあ、あきらめたまえ! 彼女は俺の彼女なんだからさあっ!」

ち、って言うのは前言撤回。軽く痛い目を見た方がこいつのためであり、俺のためでもあるだろうことを確認した。

「ああ、早く放課後にならないかな」

救いようがない馬鹿がそついい終えたと同時に教室に入ってきたどうみても三十代後半にしか見えない二十代後半の担任の斉藤。よほど暑いのか、あるいは一階にある職員室から全速力で走ってきたせいなのか、それともメタボリックシンドローム代表者とも言わん

ばかりの腹のせいなのか、額から地面へと汗がキラキラと滴り落ちていた。

「はあはあ、すまんっ！遅くなった。それじゃホームルーム始めるぞ」

すげえ汗、と小さくつぶやき松岡はスキップしながら自分の席に戻っていった。ほどなくして、汗まみれ担任、斉藤（またの名をメタボリック先生）のいつも通りのちよつとした小話が始まり、それが終わってから出席確認になる。今日は実家で飼っている猫のちよつとした話 شدたらしい。らしい、というのはほとんどそんな小話など聞いていなかっただからである。前回は実家で飼っているインコ、前々回はカメとまあ、くだらない話だ。それを何故、毎日のように話すのかはある意味この学校に纏わる七不思議のひとつに数えてもなんら支障はきたさないだろう。

それにしてもこの季節の風はなんでこんなにも心地良いものなんだろうか。これで睡眠という行動に入るなというのは拷問に近いものがある。まあ、そんな小さな欲望に負けていられるほど俺の頭脳は良く出来ていない。なんの将来のためではないが一応、大学には行きたいと思ってるので人並み程度に今日も頑張るのさ。特に行きたい大学がないので、そこらへんにある2流大学が俺にお似合いだろう。ふわっと涼しげな風がカーテンをふわりと揺らしていく。

ああ、今日も平和だ。そう、平和で良いんだ。面倒ごとなんてものは面倒なだけ、俺にはこの上がり下がりもない平凡世界があっているんだろう。そんなことを考えつつなんとなく外に顔を向けてみると、すずめ達が空中で旋回したりで楽しそうにじゃれあっている。それが追われてる方が浮気でもして、追いかけてまわしている夫婦喧嘩の真つ最中なのか。こういう何でもない事を考えてしまうくらいつまらない平凡な毎日で満足している自分がここにいた。

うん、確かに満足していたはずなんだ。これ以上何かを望んだり、ハプニングが起きてほしくないなんて毛頭望んだりしてはいない俺が、あんな目に合うとは思わなかったんだ。今回の嫌な胸騒ぎは、やはり度を超えていた。

悲劇にもこの時、朝、登校している時の嫌な胸騒ぎのことは松岡のラブレターの話でどこかに行ってしまったていたらしい、全く忘れていた俺は三時限目までいつも通りに順当にこなしていった。帰るべきだったんだ、無断早退でも構わない、一日くらいどうってことないだろう。あるいはもし、この時に胸騒ぎの事を忘れていなければ。もし、この時に奇跡的にちょうどよく38度5分という早退理由規定値に体温が上昇していれば。未来は変わっていたんだ。確実に良い方向にだ。

だが、もう遅い。あんな場面に出くわしてしまったのだからな。

第三話『世界崩壊の始まり』

通称、「101回目のプロポーズも失敗しそうな男」

「趣味は女漁りですが何か？」

「頭の8割は女のことです。出来ています」などなど。

数え切れないくらいの通称を持つ男の名前は、言うまでもなくここまでくれば誰だかもうお分かりだろう。まず、何故にこんな視聴率右肩下がり予定のドラマのような通称がいくつもついてしまったのか。それを今、思い出したいと思う。本当はあんまり思い出したくないんだが、思いついてしまったんだからしょうがない。

そう、それは入学式の頃。

淡いピンク色をしたソメイヨシノの花びらがヒラヒラと鮮やかに舞う中、見事に中央榊高校に入学した俺は、同じく松岡も入学できたことに酷く驚いていた。そこまで頭の良い学校ではないが、決して松岡が入れるくらいのラインではないと思っていたからだ。本人いわく、楽勝だったと豪語していたがな。

ほどなくしてクラスの割り当て表を配られ、松岡と一緒にクラスに

なったことを知った。松岡の野郎は本当に嬉しそうに「お前と一緒に
なれてよかった！これも「俺たち」の日頃の行いが良いからだよ
な！」と、複数形になっているのをつつこもうとしたが、止めてお
いた。

俺も一緒になれて、恥ずかしながらもすこぶる嬉しかったからで
ある。

……と一瞬でも思った俺は、どこぞの未来から来たどう見ようと
しても見えない、全身を青と白でコーディネートされた某ネコ型口
ポットに、困難の壁が現れるとすぐに助けを求める某いじめられっ
こ少年のように愚かしかったんだ。

俺たち二人は「1-1」と書かれたネームプレートが入り口に貼
られた教室に入る。まずは順当に担任の自己紹介から始まった。「
君たちの担任を受け持つことになった斉藤だ」と名乗り、フルネー
ムを黒板に殴り書きする。教科は国語を受け持っていること、部活
は文芸部の顧問をしていること、本は何よりも人間の歴史の一部で
あり、本なくして人間は成長しない、など無駄に熱いうんちくと、
部への誘い文句を散々言った後、昔はもつと痩せていてアイドル歌
手のようにカッコよかったんだぞ。と無駄なことを口走り、それを
教室にいる全ての生徒が信じなかったことだろうことは皆にきくま
でもない。

そんなこんなで、どこの学校にでもありふれていそうなプロフイ
ールを言い終わった後に始まるのは、これもどこの学校にでもあり
そうな生徒達の簡潔的な自己紹介だった。「それじゃあ、窓側の席
から」と、斉藤の声から始まり、教室の左端の生徒から順番に席を
立ち、緊張しているのか、それでもやけにぎこちなくだが口を開い
ていった。

氏名、出身中学それプラスetc（趣味や好きな食べ物とかそん

なところだ」という風に、ウケを狙う事を織り交ぜつつもしよっぱなからクラスの人気者になろうなどと企てようとする奴は存在せず、このクラスはあんまり賑やかなものにはならないだろうな、と俺は勝手に解釈した。

そういえば、と自分の席を中心とするようにぐるっと生徒達の顔を見渡してみるが、思った通りに真面目な顔振りをした男女ばかりだった。暴言を吐いて先生にたてつくような不良らしき生徒と思われる風貌をした人間は、この空間にいないとわかったところで俺はひとつ、ほーっと息をついた。これで面倒なことに巻き込まれるようなことの一つは回避されたわけだ。

順番にぐるりと俺の番も回ってきたのでなんの気負いもせずと言った風に立ってみせる。それまでに必死こいて考えていた簡潔的文章を機械的に吐き出して、ゆっくりと椅子に座り、胸を撫で下ろす。何度も言ってきたような簡単な自己紹介も皆の視線からにじみでるプレッシャーの前ではこうなるのもしょうがないことだろう。

そついや、初めに言っておくのを忘れていたが、初日は仮席として自由に座って良いことになっていたので、適当に真ん中辺りの席を俺は選んで座っていた。もちろん後ろの席には松岡が。

ということは順番にいけば俺の次は松岡だったので。そしてなんとなく嫌な予感がしたので。後ろを振り返りあまり変な言葉を発して周囲の注目の的にはなるんじゃないぞ、と微笑ましくも注意してやろうと思った、のもつかの間。

早くも松岡の常識を超越した馬鹿が発動していた。

俺が後ろを振り向いたと同時に、ガタツ、と大きく音をたて勢いよく立ち上がっていた。なにやらやけに真剣な表情で口を開き、大きな声でこう言い放った。

「俺、松岡 圭吾っ！出身中学は神西中ですっ。女子のみんな！今、俺は奇跡的にフリーだから！俺に告白したい人はちゃあんと順番を守って並んでくれよお？ちゃんと選んであげるからさ！あっ、サインはお断りだぜ！どうしてもほしいって言うんなら考えてやらないこともないけどさあっ！」

白い歯をキラんと見せて青春真っ盛りの笑顔でニッコリ笑い、なんの恥ずかしいといった素振りも見せずに親指をびしっと立たせる。

たはー。 やっちまったよこいつ。

その瞬間、宇宙空間を思わせる沈黙が、この1 - 1の教室を包んでいったのは……。

当たり前前の結果だろう。みんなの痛いくらいの冷たい視線が中心へと集まる。

やばい、やばい。急いで後ろに振り向かせていた体を黒板の方へと向ける。他人のフリ、他人のフリでこの場をやりすごすんだ。そして、その太った先生に速攻相談して他のクラスに移動させてもらい、こいつと離れさせてもらわなければ。松岡君と一緒にのクラスにいます、アレルギーー症状がそこはかとなく出るんです！みたいな事を言っつて。いっそ、違う高校に編入したいと職員室に駆け込むか？この馬鹿と友達だと知れたらそれだけで俺の高校生活は死神にとりつかれたような暗黒ライフへと早変わりするに違いない。

「……………ん？なんだこの空気？俺がなんか間違っつたこと言っつたみたいになっつてるじゃんかあ、なっつ修平」

俺の肩をポンと軽く叩く。あたり前に無視を決め込む俺の額には冷たい汗がつつーっと一滴。

そうだよ。松岡のくせによくわかってるじゃないか。よくできましたのハンコを誰もいないところで押してやるから、だから俺に触れるな、話しかけるな。……たのむから。

「……………くくつ、あつはつはつはあつ！」

長かった沈黙も担任の馬鹿でかい笑い声によってどこかへ飛んでいった。それにつられるようにみんなもリミッターを開放した力エルのようにげらげらと笑い出した。腹を抱えて笑う奴もいれば、涙を流しながら笑う奴もいる。

そんな中、当の本人はというと、

「おつ、なにに？そんな俺のことがみんな好きなのかあ？もう、困っちゃうなあ」

人気者気分を味わっていた。どう考えればそんなポジティブ馬鹿になれるのか、お前の爪のアカを煎じて飲みたいもんだ。一瞬で吐くけどな。

「……………つはつはつは、くくくつ全く笑わせてくれるなあ。もつもう座っていいぞ松岡」

「はい」つと何かをやり遂げたかのような満足気な声を出して椅子に座る松岡を、チラッと見てみたが。それはそれはもう満足気な顔でしたよ。

まだ笑いが止まらないのか、それとも拾い食いでもして当たったのか、メタボリック腹を押さえながらも喋りだす。

「くっくっく、それにしても1・1クラスに思わぬお笑いコンビが誕生したもんだな。楽しくなりそうであんな良かった良かった。それじゃ、次」

少しはこのクラスも面白くなりそうですね……っつておいメタボリツク。今、お前の口から聞き捨てならない言葉が発せられたように感じたのは俺の聴覚の衰えからなる聞き間違いなのか。それとも口が滑ったなどと科学上ではありえないような動きのことなのか？コンビってなんだ？まさか、俺もその中に入ってるんじゃないだろうな？どうなんだ！もし、そんなことがあつたら名誉棄損でお前を訴えてやるからなああああー……。……。

そんな俺の心の叫びも無駄に終わってから三日経ったが、やはり、というか当たり前なんだが。松岡の前に現れる女生徒はいなかった。そこで終わりにしておけば、ああちょっとおつむが緩い方なのか？で済まされたものを、あいつはそれをどう感じとったのか、

「ん〜みんな恥ずかしくて告白できないのかな？ならしよーがない、俺の方から言っただけよ」と

何をどう考えれば、ならしよーがないに繋がる？

自己中心的ポジティブシンキング発言をしてからというもの、毎日のように他のクラスに出向いては、「俺の事好きなんだよね？」「そこまで言うんなら付き合っただけよ？」などとほざき歩き続け、二週間後。

そりゃまあ、当然のごとく噂は学年中に広まりを見せて松岡の名前を知らない奴などいなくなり、女生徒たちは全く口を聞いてくれなくなつたのである。それをきっかけに色々な呼称がついた。それ

がどんなものか……は冒頭で言ったようなものだ。

まあ、天才的馬鹿野郎がどんな侮辱なニックネームで呼ばれようが、女子達が半径5m以内に近づこうとしなかるうが、先輩男子に因縁つけられようが俺にとっちゃ別に呼吸動作をするのと同じくらいにどうでも良いことの一つと言ったらそうである。

だが、だ。

断じて許せないのはあいつの相方として俺ともほとんどの女子が口を聞いてくれないという、卵型のチョコレートの中に入っているくだらんフィギアよりもいらんオマケまでついてきやがった。何故に俺まで？ why？ ワイ？ ワアアアイツ！？

とといった風な痛いことが2ヶ月前に発生していたわけだ。

察してくれたかもしれないが、松岡は神的にある意味では人気者だ。いまでも現在進行的に女子には冷気を思わせる明らかな軽蔑の冷たい視線が。男子にはまるで大学受験に落ちて狂気の沙汰に陥ってしまった落第者をあざ笑うかのごとくな目で見られるようになった。もちろんメタボリック星人のせいで強制的になってしまった、出身校が一緒だということだけでほとんど無関係な相方にも七割ほど注がれているのは、俺の勘違いであろうことを願わんばかりだ。

さて、なんだかさっきから俺は松岡のことしか考えていないんじ

やないか？

危ない危ない。

そんなアメリカに留学してしまった遠距離恋愛中の彼氏を思う一途な女の子じゃないんだから、つて止めてくれ！さしずめ俺はあいつの可愛い彼女ってか？とんでもない。考えるだけであの世に昇天しちまいそうだ。

脳内クリーナーで必死に洗浄していると、今一番聞きたくない声ナンバーワンの男が死にそうな声を出しながら近づいてくる。

「しゅーへえ〜……腹減って死にそうだああ……」

だから、なんだ？

今、俺は思い出し苛立ちの真つ最中で心情穏やかじゃないぞ。この野郎一人で能天気なことを言いやがって、全くもって忌々しい。

「だからあ、売店で今のうちにたんまり買ってこようぜええ」

いまにも碎けそうにふらふらした動きをして、まるで死人を連想させてくれる生気のない顔で訴えてくる。

実はと言うとこいつは、毎日のように死にそうになっているから笑えない。そんなにまでなるのなら登校時にコンビニにでも寄ってパンでも買ってくればいいんだ。そしたら中休みにでもなんでも食らいつき少しでも腹の足しに出来るだろう、と思うのは毎回のことで。何度となく忠告してやったが、それを何のこだわりだか知らないが「高校生たるもの、売店や食堂で昼飯を済ませるのが決定事項なのさあ！」だとかなんとか言いやがって、俺はもうあきらめた。

「なああ、いいだろおおお〜……」

「わかった、わかったからひつつくじゃない！」

腕にまとわりついてきたゾンビを必死にはらいのけ、教室を出る。途端に元気にぴよんぴよん跳ねだすこいつは、一発殴って静かにさせておくべきなのか？

頼むからこれ以上目立つことはしないでくれ。俺と一緒に行動している時は特に、だ。これ以上俺の高校生活三年間に支障がきたるというものなら、いち早く編入手続きを済ませなければいけないこと必死である。

一方松岡の方はそんなことは知るかあ、と漏らすようにへたくそな口笛をぴゅーぴゅーと吹かせていた。

今は、三時間目が終わって中休みに入ったところだった。

昼休みに入ってからでは、すぐに食堂は満員混雑となり立ち往生。売店の方はというとこちらもサンドイッチやらおにぎりやらを求めて長蛇の列が出来てもの見事の数分で完売。という何度も失敗した経験から、先に買ってしまおうのことを考えつくのは普通の間なら当たり前前に辿りつく答えだろう。何が言いたいかというとだ、同じようなことを考える奴もそりゃいるわけだ。

長蛇の列ってほどではないが、売店の前には十数人近く並んでいた。

「なあっ！？もう、こんなに行列がああ……おっ俺のグレートメンチカツスペシャルが危ないさあ！」

ただのメンチカツサンドに呼称をつけるな。

素早く、その小規模な列に男一人が加わる。そしてゆっくりともう一人、ため息をつきながら俺も加わる。

その途端に、なにやら痛い視線が飛んできているような気配が…

…。わかりきってはいるが松岡に対する軽蔑の視線だ。俺にもじゃないぞ？決してそんなことはない、と信じたい。

学校内では毎日のように一緒にいて（クラスが一緒なんだからしようがない）存分に逆人気者気分を嫌というほど味わって、少しは慣れてきたが、やっぱり心痛いもんだ。冷たい視線はやがてヒソヒソ話に変わっていった。

ふん、臆病者め。そんなに、言いたいことがあるのなら目の前で口に出して言えばいいじゃないか！全て、松岡に向けてっつのが事件だな。

心の中で愚痴っている俺の横で松岡が顔を真っ赤にして騒ぎ出す。

「おいっ！おいおい、やばいってえ」

何がだ？百文字以内で簡潔にたのむぞ。

「あれ、見てくれよお！」

人差し指をふるふると震わせながら指す方を見してみる。

ほう、こりやまた驚いたな。

俺たちが歩いてきた廊下の方から、美少女がゆっくりと優雅に歩いてくるじゃないか。その三步程度後ろには俺の横にいる馬鹿とは比べることが罪になりそうなくらいのハンサムな男が付き従えるように一緒に歩いてくる。本当にかわいそうなことに松岡からド勘違いされてる、噂の「蒼井 サクラ」だ。

前に並んでいた十数人の男女も気づいたのか、つられるようにざわざわ騒ぎ出す。全くもってうるさい。

「なっ、なんでこんなところにい？」

アメリカ人のオーマイガッ！？みたいなリアクションをとって頭

を抱えている松岡に、

「ちようどよかったじゃないか？今、告白の返事をしてきたらどうだ？」

と皮肉たつぷりの笑顔で言ったのにもかかわらず、

「ばつばか言うなよい！そういうのはシチュエーションってのが大切なんだよ」

やっぱり馬の耳に念仏らしい。

しかも、何処かれ誰かれ構わずに告白しまくったお前の頭にシチュエーションという言葉が存在していたことに俺はびっくりだ。まあ、それはどうでもいいとして。何故に今、この空間に「蒼井 サクラ」が存在しているんだ？

三階の端の方に位置する場所にある少しだけ広い部屋が、俺たちが立っている4〜5人のおばちゃん達がせつせと働く売店がある場所だ。普通に昼食に買いに来たことの何がおかしいかって？風に乗って俺の耳に届いた謎の噂によれば、

「確かあいつは昼食を摂らないんじゃないかってか？」

もちろんこんなへんちくりんな噂を信じているわけじゃないが一応、右のファンクラブ創設者に真相を聞く。

「おおおう。そのはずなんだけどなあ。決して他人には食事を摂るところを見られてはいけないっていう厳しい家訓に逆らうことになるから、とか」

とか？

「蒼井家専属の世界一腕利きなコックが作った高級なフランス料理のフルコース以外はのどを通らないからとか、毒見をする蒼井家スペシャルボディーガードマンが側にいないからとか、実は彼女は雲よりももつと高いところに存在する艶やかなまでに美しい女神様の分身なのではないかとか……」

はー、つまりは誰もその真相を知らないわけだ。

まあ、どうせ実際のところ、自慢の抜群のスタイルをキープするために昼食を抜いている。そんなどこにでもいそうな女子高生の定番な理由だろう。そんなでもって今日はただ単に腹の虫を抑えることが出来なくなつて、ついつい買いに来てしまったっていうだけの話だ。それを勝手に神話にしている馬鹿野郎はこのどいつだ？永遠に出てきそうな噂をぶつぶつと言っているこいつが犯人だと俺は踏んでるがね。

でまあ、そんなことはさらにどうでも良いんだ。俺は視線を前方に向けたまま視線を落とさない。いや、落とせないでいた。

20m、15m、10m、どんどんとゆっくり近づいてくるにつれさらにはつきりとしてくる。

改めて、びつくりするぐらいにほんつとに美少女だな。

ふわふわとした自然な茶系の色に染まった髪は腰に届くくらいに長く、そしてぱつちりとした宝石を思わせるような艶やかな輝きを秘めた瞳が二つ。整った顔の美しさとは比例していない小柄で華奢な体つきが、またギャップがあつてそそられる。

ファンクラブなんぞに入っている奴らなんて、松岡みたいな馬鹿の集まりだと思っていたが、わからんでもない。今にも心が奪われそうだ……いや、負けるな俺。

棒立ちになつて目をハートマークにしている、変態馬鹿が気づかせてくれる。嫌でもコレにはなりたくないんでな。

そんなことを考えている間にも美少女は近づいてくる。にこやか

な表情で俺の方に近づいている。いや、正確には昼食を買うためにこの列に並ぶためにだ。

なんとなく視線を感じて後ろを振り向いてみると、なんと俺の隣に棒立ちになっていている松岡同様、男子諸君の目はハートマークに変わっているじゃないか。そして女子諸君はスーパーアイドルを見るような憧れの眼差しで爛々とした輝きを見せている。

男女かかわらず宗教団体的なファンクラブが存在するらしいことがわかる。「サクラ様〜！」と黄色い声が飛び交うくらいだ。それに応えるようにニッコリと天使のような笑顔を見せる。まさに売れっ子アイドルだな。

大げさだろ、たかだか女子高生だぜ？とか小さく皮肉をつぶやいてみせるが、かくいう俺も見惚れてしまっているのを隠せない。まぶたを閉じるのも惜しいくらいに凝視してしまっているからな。いやあ、全く情けない。

3m、2m、目と鼻の先くらい近くになるまで見てたらそりゃ、目も合うよな。その通り。色素が薄いためか茶色く、宝石のような両目で俺の顔を見つめてくる。たぶん。そのまま、花のつぼみを思わせる小さな唇が開く。そんな唇から零れるように出てきた声はやはり、「ごきげんよう、みなさん」美しいソプラノが耳の中に響き渡る。またもや響く黄色い声援に、もう一度崇拜者達に可愛くニッコリと笑顔を見せてくれる……ってあれ？今、少し邪悪な笑みに見えた気が……

その瞬間だった。

ビリリツと痛くないくらいにの静電気のようなモノが頭からつま先まで駆け巡った。

なんだ、今のは？アイドル特有のオーラから発せられるシロモノか？考える間もなく俺の横を蒼井サクラが通り過ぎる。なんとも言えない芳しい香りを残して。もうどうでもよくなった俺はゆっくりと歩

く彼女を何も言わずにゆっくりと視線を追わせる。

……つておいおい、普通に順番無視かよ。まあ、順番無視なんかであんたを咎めるやつなんてここにはいやしないだろう、それに喜んで「せひとも割り込んでください！」とか言い出すだろう、こいつらは。

ついつい触りたくよくなふわふわの長髪を揺らしながらゆっくりと歩く後ろ姿に何も言えない俺も、俺なんだけどな。

美味しそうなおにぎりやサンドイッチが並ぶガラス張りの棚の前に立ち、どれにしようかと首を傾げている。

いやはや、悩んでる姿も可愛いじゃないっすか。とか俗なことを思いつつ、俺はやつとこさ奇怪な現象が起きていることに気づいた。

……音が聞こえない？

さっきまであれだけ騒がしかった女子の奇声とも言えるものが全く消えていた。それだけじゃなく何の音も俺の耳には入ってこない。背中に冷たいモノが走り抜ける。

恐ろしい光景が目の前に広がっていた。ロウ人形のように固まっているんだ。ついさっきまで美少女が歩いてきた廊下の方を向いて、十数人の生徒たちみんなが。

大口を開けて手を振ろうとし固まっている奴もいれば、飛び跳ねながらそのまま空中で微動だにもしない奴もいる。冷たい汗が頬から顎へ伝わる。

どうなってるんだ？まるでこれじゃあ………時間が止まっているみたいじゃないか。

頭が暴走したようにフル回転を始める。

いやいや、待て待て。冷静になるんだ修平！そんなことがこの世界で起こり得るわけないんだ。時間が止まるなんてことはアニメの

中やゲームの世界で充分だ。ここは地球だ。ましてや、ここは銀河の果てにある人類未踏の星なんかじゃない。時間が止まるなんてことは絶対にありえないんだ。でも、それじゃあこの有様はどう説明すりゃ良いんだ？ふと、気づいたように隣に目をやる。やはり、馬鹿松岡が馬鹿の顔をしたまま棒立ちに固まっているだけだった。

ひと昔前のパソコンくらいに回転が遅い俺の頭はパンク寸前、爆発5秒前にまで到達していた。

どうして俺以外のみんな固まっちゃったんだ？携帯電話みたいに充電が切れて動けないとかか？そんなロボットじゃあるまいし、いや、それかこれは夢なのか。ある意味それが一番真実味があるような……ん？ちよつと待て。何かがおかしい。

当然俺の視線は、芳しい香りを残した後ろ姿に向けられる。

……俺だけじゃない。

そう、何事も起きていないよう自然に歩き回っている美少女はまぎれもない中校のマドンナ。

「蒼井 サクラ」だった。

第四話『蒼井サクラ』

ああ、今日の夕飯が楽しみだ。

昨日は「ちよつとだるいから」とかなんとかそんな私的事情で仕事をバツクれたからな、あの母親は。おかげでお湯を入れて三分でゴー！の某インスタントヌードルを悔しくもズルズル頂いてしまったじゃないか。久しぶりに食べたせいかな、やけに美味しかったので少しは許せるが、それでも日本人の性なのかどうかわからないが夕飯は白くてツヤやかな米を食したかった。

だるいから、などと最近の女子高生じゃないんだから……一から十まで主婦のなんたるかを教えてやりたいところだが、生まれてから十六年このかた主婦になつたことはお生憎様、一度もないんだからしょうがない。うーん残念だ。でも、昨日の今日だ。絶対に作っていてくれるだろう。ん？自分で作れば良いじゃないか、って？

「悪い。そりゃ無理だ。」

あー決して俺は料理ができないとか、先端恐怖症で刃物の類は持てません的な臆病者でもない。

中学生の時に家庭科の調理実習で作った『イタリア風ハンバーグ』のかな優しい香りを乗せて』は、他の生徒に郡を抜いてそりゃあもう先生も太鼓をばんばん叩いてくれたほどの絶品だったくらいだ。

かといって、それだけしか作れないなど笑止千万。ほんのたまに、本当にたまにだが自分でオリジナルの料理なんかを家族に披露してみせるくらいに、趣味とまではいかないが料理は好きな方だ。

もちろん家族はほつぺたが零れ落ちるほど泣きながら美味いと……までは言っていなかったが、まずまずのウケを見せてくれる。まあ、

とりあえずあらかた料理は出来るほうだ。じゃあ、それならなんで作らないのかって？それは、当たり前で単純な理由。

だるいのだよ。うん、実に面倒くさい。

学生たるもの毎日のごとく約六時間におよぶ拷問のような学業労働をこなして、時には居残りというプラス もなんとかこなし、ポロボロになりながらも帰路に着く。涙ぐましいほどの努力をして戦争から帰ってきた若者を暖かい飯を食わせ、心身ともに癒すのは母親の当然であるう義務ではないか。

それを、簡単に放棄するなど言語道断！

まあ、昨日の失態の罪滅ぼしに今日は好物のピーマンの肉詰めを作ると言っていたからなかったことにしといてやるか。

と、さて …… そろそろ現実を目を向けるとするかな。

このままずっと夕飯の事を考えていたのが本望だが、そうもいかないのが悲しい悲しい現実である。ふう、本当に泣きたくなるな。

上の空旅行から帰ると、目の前にはやけにリアルなマネキン人形が群れを成して並んでいた。ぴくりとも動かないその人形の先で、何事も無いように一人、顎に手を当てて今日の昼食は何が良いかと悩んでる、まばゆいばかりの後光が射しているかのような美少女を視線の先に見る。それはあまりにも異様な光景としか思えなかった。どうやら人間ってのは衝撃が大きすぎる場面に出くわすと意外にも声が出ないもんじゃない。情けない話しだが呼吸をするだけで精一杯だ。それでも冷や汗を垂らしながら一回大きく唾を飲み、ギリギリ聞こえるくらいの大きさの声で恐る恐る吐き出す。

「あつ、あんたがやったのか、これ……？」

こんなこと人間ができるはずもない、もちろん俺だってそうだ。

だがそうはわかっただけでも実際に動いているのは俺と彼女だけだ。馬鹿な質問だと思うかもしれないが、たぶん彼女は知っているだろう。だって俺はこんな能力は持っていないんだから。だろう？俺。声をかけると、途端にこちらに顔を向ける美少女。さきほどに見せてくれた天使のような微笑みとは違って変わった驚きと困惑を織り交ぜたような表情をしている。なんで？どうして？と顔に大きく書いてあるのが見えるようだ。そしてその口から漏れるようにして予想通りの二言、

「なんで……どうして……？」

あまりの衝撃だったらしく、口をぽかんと開けたまま立ち尽くしている。

あの、そんな顔でそんなことを俺に言われても何の返答のしようがないんですが、どうしましょう？いやいや、しかもその言葉は俺の口から発せられるのが正しいと思うんですがそれは間違いなんですかね。この状況でそこら辺に立っている樹木を見ているかのようには平気でいられるあなたに、俺の頭の上には特大のクエスチョンマークが浮かぶばかりだ。

しかし、なおも困惑の表情を崩さないまま、顔を地面に向けて一言、二言何事かつぶやいたと思っただら、今度はハッと我に返った顔をして睨み付けるような目で凝視してくる。悪寒を感じさせる鋭利なナイフのように、鋭く睨みつけてきたのでついつい一歩後ろに身じろぎしてしまった。

なんだなんだ？なんかカンにさわることでも言ったのか？それにしても、かなり怖いけど怒った顔も良いなあ……って今はそんな場合じゃ、

「……っへ？」

瞬きをした瞬間、ついさっきまで視線の先にいた、秘境の地に住んでいる優雅な面持ちのエルフもびっくりの美少女がポツカリとその姿を消していた。しかも、それだけじゃない。今まで、電池の切れたオモチャみたいに固まっていた十数人の生徒たちがスイッチをオフからオンに変えたように何事もなかった風に動きだしていた。隣の馬鹿面も同じく何事もないようにいつも通りの馬鹿面で、胃の辺りを手で押さえながら腹を空かせた野良犬のような顔で立っている。

「あああ〜しゅうへい……俺はもう死にそうさ。こうなったら売店強盗でもして好きなだけ食べちゃうかあ」

これから一生他人として振舞ってくれるという契約書にサインをしてくれるのなら、別に俺はいつこうに構わないが……ってそんなことはどうだっていい。

「なあ、松岡。ついさっきまで蒼井サクラがここに居たよな？」

そうだ。さっきまでこの空間に蒼井サクラは存在していただろ？なんでみんな普通にしているんだ？大量の液体窒素をかけられたようにして、お前らが固まる前にはあれだけ騒いでいたじゃないか。という俺の思惑とは別に松岡は不思議そうな顔をして、

「はあ？いきなりどうしたんだ修平？どこに俺の未来の奥さんがいるんだあ？もう、びっくりさせんなよお」

バンバン、と背中を引つ叩いてゲラゲラ笑い出す。

「夢でも見たんじゃないかあ？あつ、そうかあ修平、俺の未来のお嫁さんに手は出さないでくれよお〜いくら修平だからって俺も怒っ

「ちやうぜい？」

駄に含みのある笑みを見せてくる。それにやけたツラに渾身の右ストレートを今すぐにもブチこんでやりたいところだがそれは次にとつて置こう。こいつに構っているヒマはない。錯乱しそうな頭を必死に押さえ込んで考える。

どうしてだ？

これじゃまるで「蒼井サクラ」がこの場に来ていなかったみたいじゃないか。松岡の言うとおり、俺はいつの間にか立ったまま居眠りしていたんだろうか？そして、その夢の中に出てきたのは美少女「蒼井サクラ」で、しかも俺以外の人間は時間が止まったかのように固まっていて、何故だか蒼井サクラは怒って俺のことを睨みつけて、そこで終わり？そんな馬鹿な夢あるもんか！俺は松岡の頭みたいにまだ破滅していやしないぞ！

頭の中はすでに火山の噴火爆発寸前にまでパンクしかけている。

「あーもうわけわからん。……よしっ、もう考えるのは止めだ」

もう、だるい。かつたるい。

こんなにくら考えても出てこない迷宮入りの謎を解き明かそうなんてのは非常に面倒くさいだけ、考えるだけ無駄だ。こんなことに頭を使うくらいなら現実逃避した方が幾分マシさ。しかもさっきのは現実なのかどうかも定かじゃないしな。

あれだ、ひよっとしたら本当に立ちながら居眠りするというアクロバットな技術をいつの間にか習得していたのかもしれないし、夢だったらそれに越したことはない。物事良い方向に考えなきゃ損だからな。少しはミスターポジティブシンキングを見習うとするか。

「なあ？さっきからぶつぶつと、何を考えるのを止めたんだあ？」

覗き込むようにしてジロジロと顔をうかがう松岡、糸のように細い狐目をいつもより少しだけ大きく開いている。それに応えるように手を拳げ左右に振る。

「気にするな、ただの独り言さ。……ほら、そろそろ俺たちの番だぞ」

だんだんと、せつせと働くおばちゃんの明るい声が近づいてくる。ラグビー部か柔道部に所属しているだろう巨体の男がおにぎりを紙袋いっぱい抱えながら去ると、その次に俺達の前にいたカップルらしき二人が何やら仲良さげにあれが良いだのこれが良いだの討論して、待ち構えたおばちゃんに注文する。カップルが菓子パンの入った袋を受け取り、お金を渡し終えイチャつきながら去る。と同時に松岡が飛びつくようにして声をあげる。

「おばちゃんっ！いつものやつお願いね！」

目をキラキラ輝かせて無意味に大声で注文する。

おいおい、そんな常連めいたことを言っても、おばちゃん達が困惑するだけだろう。普通にメンチカツサンドと言え。

おばちゃんはお年玉をせがんでくる可愛い孫を見るような笑顔を見せる。

「あら？誰かと思ったたらあんたかい。今日も元気良いわね！はいはい、いつものやつだね」

はいはい、って通じるんですか。いつの間におばちゃんとそんな仲になったんだお前は。

お年玉をまんまと手に入れることのできた子供のようにニヤリと

笑いながら、

「ふっふっふ、ちょっと前からおばちゃん達に頼んでおいたのさ」

誇らしげな顔をして俺を見る。

なんとなくむかつくが、まあいいとしよう。

俺も、鮭おにぎりと梅おにぎりを頼んだ。鮭おにぎりもそうだが、ここの梅おにぎりはそこら辺の店に売ってるものとは一味違う。米もさることながら、何よりも梅が素晴らしい絶妙な酸っぱさと甘味のハーモニーを奏でている。おばちゃんに聞いてみると、梅は自家製のものらしい。なるほど、うまいわけだ。

梅好きの俺にぜひとも分けてもらいたいもんだ。家族も父親を抜けば大人気の食材だから喜ぶだろうしな。

「はい！おにぎりの子はこっちの袋ね？それと、グレートメンチカツスペシャルはこっちだよ」

五分くらい待つと、はいっ、と俺達に袋をわたす。ワイイと今にも叫び出しそうな顔で嬉しそうに松岡が受け取る。

それにしても本当にグレートメンチカツスペシャルは存在してたのか。というより、松岡が作ってくれと無理やり頼んだんだろうが普通のメンチカツサンドと何が違うんだ？袋のサイズは俺と同じくらいのもんだから、そんなに大きそうってわけじゃなさそうだな？中身が違うとかか？と大事そうに抱えている袋を見ると、何を勘違いしたのか、

「んん！？修平っ、これは俺のだからな！絶対にやらねえぞお！」

キツと泥棒を見るような目つきで睨みつけてくる。

おい、お前と一緒にするな。

それにしても、よく特別メニューなんて作ってくれたよな。普通こういうのってダメなんじゃないか？なんてことを考えていると、おばちゃんは察してくれたのか、ニツコリと笑顔シワを作りながら、「いつもいつも、あんたほど嬉しそうに買っていく子はいないからね。おばちゃん達も作ったかいつてもものがあるってもんさ！だから、あんただけは特別だよ？ほら、代金もほんの少しサービスしてあげるよ」

そう言うと、俺の方をちらっと見て「もちろん、あんたもね」と目で合図してくれる。そりゃ、ありがたい。ペコっと一礼をする。なんせ学生の身分なもので、少しでも節約したいと思っていたところだ。いやー助かる助かる。松岡と一緒にいて得したことなんてこれが初めてかもな。

「おばちゃん、毎度サンキューねえ！」

チャリと音をたて、順におばちゃんの手にお金を渡していく。もちろん一割引のサービス金額を、だ。

もう一度軽く礼をして、俺達はその場を後にする。松岡のスキップに早歩きで教室に帰ると、タイミングよく授業開始のチャイムが学校中に鳴り響いた。

第五話『思考回路侵略』

なんだか食欲も失せて、あんまり味気の無いものになっちゃってしまっただけに、ちびちびと口に運ぶ。

やはり、雲ひとつない気持ち良すぎるくらいの下で、何も浮かんでいない澄み切った水色の空を眺めようとすると、太陽が眩しすぎて目がくらむ。チカチカする目を閉じて軽く息をつく。

……ありゃ、一体なんだっただろうな。

四時間目が始まった後もずっと頭の中で、あの光景が行き来してしまっていた。授業が終わった後、何の教科だったのかもわからなかったくらいに脳は機能を停止していたくらいだ。いや、ある意味フル活動していたんだろう。思い出したくも、考えたくも無かったのだが、寄生虫のようにしつこく脳にからみついてくるのだから処置の施しようが無い。

だってしょうがないだろう？あんな光景見て、すぐに忘れられるか？

中校の絶大の人気を誇るマドンナのいきなりの登場。

見間違いかもしれない、一瞬見えたまるで魔女のような邪悪な笑み。

時間が止まってしまったかのように動かなくなった生徒達。

驚きと困惑の表情の後に見せた、好戦的な目。

瞬きをする間に消えてしまった美少女。

それと同時に動き出した、何事も無かったように忘れてしまっている生徒達。

そして、何よりも謎なのは

「何故、俺だけが動けたんだ？」

そして、俺が動いていたことに「蒼井サクラ」は酷く驚いていた。こんなことはありえない、といった面持ちで。

どう自分に言い聞かせても、やはり夢とは思えないほどリアルだ

ったあの出来事が頭に焼き付いて離れない。でも、こんなこと考えてもどうする？この事件の張本人と思われる彼女に聞きに行くか？さっきの出来事は何だったんだ？あれは夢じゃないよな？現実のことなんだよな？それじゃあ、あれはアンタがやったのか？どうなんだ！……って聞くのか？

馬鹿馬鹿しい。そんなことを彼女に聞いたとして、やっぱりあれは全部、夢か幻想だったらどうする？

こんな狂ったような話しを聞かされて、先生に「おかしな人がつけまわして来るんです」とか告げ口されたら、すでに誰かさんのおかげで変人扱いされてる俺は、もうこの学校にはいられなくなるぞ。大体、「蒼井サクラ」に手を出した！みたいな世迷言が流れたらどうする？その瞬間、過激派の宗教団員に俺は撲殺されそつだ。考えるだけで恐ろしい。

まあ、大してこの人生に未練はないが、まだ死にたいと言った自殺願望的なものは持ち合わせてないんでね。さわらぬ美少女にたたりなしてヤツだ。

「うつほお〜！いったただきま〜す！」

この上ない幸せな顔をして、通常のメンチカツサンドよりも一枚多くメンチカツが入った、キャベツ多めの、通常のメンチカツサンドと何の変わり映えのしないグレートメンチカツスペシャルに食らいつく。

噛むのも待てないくらいなのか、大きな口で二、三回噛むとすぐに飲み込んでしまった。

「ん〜……ゴクン。くうう〜やっぱりこれだなあっ！」

仕事帰りの一杯かのような口調で歓喜の声をあげる。カバにも勝てる大きく開いた口で、また二口目、三口目と食らいついていく。

見ていて爽快なくらいに豪勢な食いつぶり、俺の心は幾分かすうーっと晴れていくようだ…… ってのはなんてことのない冗談だ。

「……………モグモグ、なあ……………ムシャムシャ……………どうしたんだよ……………モグ」

「口のモノをちゃんと歯と歯で分解して胃の中に放り込んでから喋ってくれ」

親指で口を指して言うと、気づいた様子で顎を激しく動かし始める。数秒で飲み込んで一息つくくと、改めて俺に向き直って、

「なあっ！なんかあったのかあ？さっきから難しい顔しすぎだぞ修平」

真剣な表情のようなものを見せて聞いてくる松岡。

悪いが、ソースまみれの顔で言われてもなんの説得力もないぞ。

最後の一口を口の中に投げ込み、一度も噛まないで飲み込む。

「……………んぐ、ぷはあく。そんな顔されてちゃ、美味しいグレートメソチカツスペシャルも食べがいがなくなっちゃうだろおう？」

そう言いつつも、嬉しそうな顔で二つ目に手を出す。

それじゃあ一つ聞きたいが、俺の大切な癒しの場所にズカズカと上がりこんで来て、さらに、毎日のように心痛まされているのを唯一、免れる昼食の時間を邪魔するその元凶となる男はどこのどいつだ？

山を削り取って作った、我が中央榊高校はもちろんのこと山に囲まれている。一つしかない正門から、一番後方の位置に、台風が直撃すれば確実に全壊するであろう風貌の非常にこじんまりした古い

体育館が外壁に沿うようにして立っている。

これまた年期を感じさせる、ヒビだらけのコンクリートの壁を越えれば、青々とした山の一端が目の前に広がるんだが、それだけじゃない。誰がこんな場所を作ったのか、何時作ったのかなんてことは知ったことではない、が俺にとっては最高の場所がそこにあつた。コケがかった大きめのベンチ。何があると言ってしまえばそれしかない、ちよつとした広場のような、ただ、それだけの場所だ。

だが、その秘密基地的な感覚が好きだった。

だいたい、このヒビだらけの外壁は、以外にも3m近くあるだろう高さであつて、それを乗り越えるには、ちよつとやさつとじゃ登れそうも無い。それを俺は奇跡的に発見したトビラによってこの場所に来ることができたのだ。

体育館の舞台の方にある階段を下りて、薄暗い地下の通路の奥を行くと、一見行き止まりになつていて通れないんだが、良く目を凝らすと、机が山になつてある後ろの方に、サビのせいか茶色に染まつた小さな鉄製のトビラが隠れているのを見つけた、というわけだ。どうして、俺がそんな薄暗い場所で見つけられたのか、何故に、そんな場所に居たのか……まあ、それは置いておこう。説明するのがなんだか面倒だ。

え？いきなりなんだ？つて？別にどうだつて良いだろう。誰にだつて人に話したくないプライベートのひとつや、ふたつある。もちろん俺もその一人だ。

俺は毎回、ここで昼食を食べてるといふわけではないが、ふと思つた時にこのコケベンチに座つて、暖かい日差しを受けながら、美味しくご飯をいただいて、心身を癒していた。というのに……

「んん？なんだあ？」

どこからかゴキブリのように沸き出てきたこの男に全てを壊された。ああ、どんな事が起ころうと、こいつにだけは知られたくな

ったのに……。

「おいおい、そんな目で見るなよお？俺にはそういう趣味は悪いけどないぞ？」

「何百万回生まれ変わったとしても、お前をそういう目で見る事は決してないだろう。思う存分安心してくれ」

まあ、もう別にどうでもいい。

とにかく、この場所は本当に不思議な場所だ。ここで休んでいると不思議と思うくらいに気持ちが悪く、スーッと晴れていくのがわかる、悩みの全てが消えていくというわけでもないが、気分が優れていくのは確かだ。

体の疲れみたいなの、毒素が抜けていくように……ってそりゃ言いすぎか。なんらかのリラクゼーション効果が出ているのは間違いないだろう。ひよっとしたら周りの木々が濃いマイナスイオンを発生しているのかもな。

青々とした木々が風で気持ち良いくらいにざわめく。

これで、隣にいるのがむさ苦しいウマシカ男なんかじゃなくて、もう目にその姿が映るだけで頭がすっきりするようなら、マドンナ的美少女だったらそりゃもう……

っておい。

ああ……本当に重症のようだ。俺の思考回路は蒼井サクラに汚染されてしまった。

第六話『ドリームエンジェル』

「ほらほら、また顔がこわいぞお？笑って笑ってい」

グレートメンチカツスペシャルを早々と食い終えて、食後の運動とばかりにぴよんぴよんと飛び跳ねて楽しんでいる。のかどうかはわからないが、それなりに鬱陶しいことには変わらない。

「……ほいつ、ほいつ、よっしょつと！うん……いんやあくやつぱりここにいると気持ち晴れ晴れするよなあ！修平もそうだろう？」

お前は年中無休のオンリーで晴れてるだろうが。もう、1mm単位の雲も見つからないくらいに。

真冬に、Tシャツにハーフパンツでマフラーを首に巻くという、スペシャルナンセンスなファッションをかまし、なおかつ風邪の類には一度もお世話にならないという変態的なタフガイだからな。こいつの体内温度計は確実に常人のものとは別モノと思ったほうが良い。愉快なくらいいまだに、飛び跳ねて楽しんでいる松岡の野郎を横目に、ベンチに寝っころがる。

びっくりするくらいに皆さんと晴れてる今日の天気は、梅雨の事なんかすっかり忘れてしまっているんじゃないか、とぼやきたくなるほどだ。そりゃ梅雨が来ないでくれるのは、それはそれで嬉しい事この上ないが。この世界には水分というもんは必要不可欠だ。決まった時期にちゃんと降ってくれないと、俺たち動植物はまいつてしまうからな。

だいたい少しわがまま過ぎるのかもしれないな、俺たち人間は。少し降りすぎると大騒ぎし、降らなければそれはそれで大騒ぎす

る。お天道様だって忙しいんだ、ちつぽけな俺たちの事なんて考えていられないのさ。実際、お天道様なんていうもんが存在するのかわかさえ怪しいものだ。ひよっとすれば、某共和国のどこかにある怪しげな研究所で、また怪しげな研究員達が世界中の天気を、またまた怪しげな機械で操っているのかもしれない。またそれが、意外と近所に住んでいる今や置物と化している梅ばあさんが、天気を自由自在に操る事のできる天駆けるスーパーババアなのかもしれない。

「な〜あ、寝るのかあ？おーい、しゅ〜へえ〜……」

それにしても気持ち良いな。今日の売店で起きた夢みたいな事で悩んでた自分が、まるで夢みたいに思えてくる。いや、夢であって欲しいってのが切実な願いであるんだがな。頼むよ、ほんとに。

普通、あんな事をもろに体験したら、軽く脳震盪を起こすか、精神が崩壊してもおかしくないんじゃないか？そう思うと、俺は実に冷静沈着だったと思える。

恥ずかしい話でもあるが、昔から感情表現が豊かな方じゃない少年時代を過ごしていたので、激しい動揺を表現することが出来なくなっているのかもしれない。というのが俺による、俺自身の見解だ。

全く運が良いんだか悪いんだか……。

「しゅ〜へえ〜……おお〜いい……」

忘れよう。

今日のことはずつきりこつてり忘れてしまおう。根拠という根拠は全くと言っていないが、なんだかこの調子なら忘れられそうだ。これもこの場所のおかげかもな。

このあとの、5時間目、6時間目をなんとか乗り切って……ん？

5時間目は何だったけな？確か6時間目が数学で、ああ俺の苦手教科ランキングぶっちぎりにナンバー1の座に君臨している英語だったな。考えるだけでうんざりしてしまう。日本人は日本語だけ喋れたら別に良いじゃないか、とまでは言わないが、特に喋れなくても問題ないだろう。大体、この学校の授業でやる英語なんてものはアメリカに行っても到底通用するレベルのもんじゃないし、無駄に文法やら単語やらを機械的に教えているだけでほとんど意味がない。どうしても英語を覚えたい奴は、専門の教室にでも通えば良いだろう。

そしてまあ、何も考えず家に帰り、夕飯を食べて風呂に入り、そのまま何も考えず就寝に……あつ、そういえば今日の夕飯はピーマンの肉詰めだったな。それはそれは、そこはかとなく楽しみで楽しみでしょうがな……いなあ……

……
ここはどこだろう。

見渡す限りに広がる綺麗な花畑。見たことも無い色、形をした花達が足元から地平線の彼方まで美しく色を染めている。花に囲まれているせいなのか、甘い香りが鼻をくすぐるようにして、フワフワした気持ちにさせてくれる。

ここは天国なのか？

そんなわけではない。が、そんなことを思わせてくれるくらいにここは心地よかった。鮮やかに美しい色が目に入り、それが体の中に

染み渡り、心の奥底に溜まった、何かを浄化してくれる。そんな感じだった。もしも本当に、天国というこの世の者ではなくなったら、達が行き着くところがこんな場所ならば、行ってみたいと心惹かれるものがある。

これは夢なんだろう。なんとなくだが感覚でわかる。それにこんな美しい景色は、地球上には存在しないだろうからな。もしあったなら、世界一有名な観光地となって膨大な量の観光客のせいで大パニックになること間違いなしだろう。

しばらくの間、その景色に目を奪われていたが、もう一度辺りを見渡してみると、5メートル位離れた場所にこれまた美しい少女が現れた。

「君は、誰なんだ？」

何故だかわからないが、彼女の事が知りたくてしょうがない、そんな気持ちになり、気づくと声をかけていた。

少しの濁りのない、真っ白な長めのワンピースを身にまとい、フワフワした長い茶髪が印象的で、宝石のような綺麗な瞳が、心をふわつかせる。

なにかマドンナ『蒼井サクラ』を彷彿とさせる風貌をしてるが、こっちの方がだいぶ幼い。いや、まるで蒼井サクラが小学生くらいに幼くなった、というのが一番わかりやすい表現だろう。

謎の少女は、返事をするかわりに、にっこりと満面の笑顔を見せてくれた。『天使』の見本のようなその風貌に俺は、何故かはわからないが。

涙を流しそうになった。

……おお〜い……しゅ〜へ〜い……

誰かが俺の名前を呼んでいる。嫌な響きのある、出来ることならあと10年は聞きたくない声が、俺の名前を呼んでいる。

これは起きないでおいたほうが自分の身のためだろう。

「……しゅ〜へ〜いっ！！起きろってばあ！」

「……んんっ……うおっっ！？」

どこからともなく聞こえてくるむさ苦しい声にしびしび目を開けてみると、これまたむさ苦しい顔が10センチ近くの場所に……おえっ。

「おおっ！やつと起きたかあ」

はい、おかげ様で史上最悪な目覚めだよ。

せつかくの晴れ晴れとした爽快感が、松岡のむさ苦しさでどこか逃げていつてしまった。ぼやけている目をこしこしと手の甲で軽くこする。

それにしても、変な夢だったな。いや、夢なんてものは変で当たり前なんだが、むしろ俺なんかは良く変な夢を見る方なんだが、違

う。いつも見る夢とはなんだか次元が違うような気がした。それにあの女の子……。

まあ、しょせんどんなに気にしたって夢は夢だ。なんの答えも出んさ。でも、こういう夢ならもう一度くらい見ても…… 悪くはないな。

「しゅ〜へ〜い……？」

あーわかったから離れる。これから二度とその鬱陶しい顔を半径1メートル以上近づけるんじゃない……

「……って今、何時だっ！？ 何時間目だっ！？」

寝ぼけた体をあわてて立たせたため、貧血を起こしたのか少し眩暈がする。

「おいおい、そんなあわてるなってしゅうへえ。まだそんな時間経ってないってえ」

俺のあわてている姿を見て楽しかったのかどうかは知らんが、にやにやと笑いながら手を振る。

「え？ あっそうなのか。良かった」

ふうつ。少し体を休めるつもりが、いつのまにか眠ってしまっていたらしい。でも、そんな時間が経っていなくて良かった。授業を遅刻したり、サボったりすると、担任のメタボリックの奴が燃えさかるようにキレだすからとてつもなく面倒くさいらしい（俺はこれでも遅刻は一回もしたことがない。ちなみに常習者は松岡）。それよりも先に自分の脂肪を燃やせ、と忠告したい。

俺が一安心しているその横で、松岡が頬を気持ち悪くも膨らせている。

「修平ったら俺のことを放ったらかしにしてグーグー寝ちまうんだから酷いよなあ」

勝手についてきて、放ったらかしもなにもないだろうが。

うんと、軽く伸びをしてコリをほぐす。さすがに硬いベンチの上で寝れば肩もこる。

「……………それにしても俺はどれくらい寝てたんだ？」

チャイムが鳴ってないところを見ると、まだ昼休み中みたいだから10分、20分くらいか？そう聞くと、松岡は顎に手を当て考える素振りする。

「んーと、ざっと二時間くらい？」

そうかそうか二時間くらいって事は結構ガツツリ昼寝してたみたいだな。そりゃ肩もこるわ……………ん？

「……………つつつつ二時間!？」

「おう、そんな感じ!」

にっこりとピースし、自信ありげに答えてくれる。

俺は即座にポケットに手を入れて、まだ真新しいスノーホワイトカラーの携帯を取り出す。待ち受け画面には我が家の愛猫の憎らしい顔と、もう数分で15時を示さんとする時刻が表示されている。

「……………」

やらかした。

完璧に遅刻だ。いやいや、ここまできたら2教科ともにサボったと言ったほうが正しい。ちくしょう。

そうじゃなくても、入学早々にちよくちよく体調を壊して欠席している俺にとって、1時間、1時間がどれほど貴重なものか……………。

「んん？どうしたあしゅうへ？」

がくんと、うなだれた俺の顔を覗き込むようにして聞いてくる。顔を近づけるなど言ってるだろうが。

「……………松岡クンよ。どこがほんの少ししか寝てないと言っのだろうかな？6時間目終了時刻まであと10分もないと思うんだが」

そう聞くと思った通り不思議そうな調子で

「んん？だって、たったの二時間なんて全然休めないだろお？俺なんか12時間以上は寝ないと気がすまないというか、癒されないというか……………」

お前は一体、何時に寝てるんだ。寝てる間にポロポロと頭のネジが外れまくってるんじゃないか？部屋の掃除には大きな磁石を使っただほうが早そうだ。

「……………そういえば、俺が寝てる間は何をやっていたんだ？」

「そりゃもう、踊り尽くしたさあ！」

何故だ？とつつこみたかったが、別にどうでも良い。聞いたところで満足できるような返事は返ってこないのはわかりきった事だ。それよりも問題なのは、松岡がなんだかわからない怪しげなダンスで踊り狂っているその横で俺は眠りにふけていたということになるか。……軽く死にたくなるな。

「……じゃあ、俺のことを起こそうとは思わなかったのか？」

「そりゃ最初は起こそうとしたさあ！でも、今日はなんだか疲れていたっぽかったから、ぐっすり眠らせてあげようと思って静かにしてたのさあ。んでもってそろそろ寒くなってきそうだから寝るんだったら保健室か、家に帰って寝たほうが良いぞって思ったから起こしたのさあ！」

「そうか、お前でもこんな時に限ってそんな気遣いができるんだな。」

ありがとう。本気でぶん殴ってやりたいよ。

第七話 『放課後メタボリックシンドローム』

そろりそろり……

先生にばれないように抜き足、差し足、忍び足で教室に静かに入り込む。

なんて事をしてもなんの意味もないので、なんて事もないような顔をして黒板のある方とは逆の入り口の方からから普通に入る。

「ん、君達、松岡と小澤だろう？ いままで一体なにをしていたんだ？ 五時間目もサボったそうじゃないか」

英語の教師、平塚がチラッとこちらに顔を向けてそう言い放った後、すぐに顔を向きなおし、黒板に長つたらしい英文を書く作業を再開する。授業の終わりが近づいているせいで、あせって書くため字がとても汚く見づらい。

平塚は、いつも授業の進行スピードが遅く、だいたい最後の5分くらいになって急ぎ始める。そのせいで俺達生徒は毎度とてつもなく迷惑しているのだが、一向に平塚の野郎は直そうとはしない。今度、校長にでも訴えてみるか。

……さて、ここは効果あるのかどうかはわからないが、軽く言い訳でもしてみるのがセオリー。少しでも罪は軽くしておいた方が良さだろう。だいたい、昼休みから今までぐっすりやすやすと眠りにふけてました。なんて馬鹿なこと言えるはずなしに、俺はそんな正直者でもない。片手で下腹部の辺りを軽く押さえながら、眉をしかめていかにもつばい声で返事する。

「すみません、ちょっと具合が悪くて保健室に……」

我ながらなかなかの名演技だ。これならトロい平塚のヤツは少しは騙されてくれるは……

「俺は、オリジナルダンスの練習してたさあつ！んでもって修平は俺の横でぐっすり昼寝してたんさっ！なっ？」

「……………」

まあ、来るとは思ったよ。ああ、思ってたさ。

「……………そういうことで良いのかな？ 小澤」

気づくと、すでに教室内にはクスクスと笑い声がこだましていた。教科書で顔を隠しながら笑う者、にやにやと笑いながらこそこそ話す者。いまさら言い訳しようにも意味をなさないことが見て取ってわかる。

「……………はい。すみません」

ルンルンと調子良く席に座った松岡とは対照的に、うなだれるようにして自分の席に座ると、ちよつどよく流れてきた授業終了の鐘の音と、破裂した風船のように我慢できなくなったクラスメイトの爆笑する声が、教室の外にも濁流のように流れだしていった。

はあーめんどくさっ。

窓から差し込むオレンジ色の夕日が下校時間であることを知らせてくれる。教室にはいつものように溢れかえっている生徒達の姿は見え、しんと静まりかえっている。はずなんだが「1-1」の教室は違った。国語の教師兼1-1クラスの担任を受け持つ斉藤が一人の生徒に延々と長つたらしい説教をしている。その一人の生徒とは……はあ、俺のことである。

机を向かい合わせにして座り、休むことなく口を、顔を、体型とは対照的に機敏に動かしている。

「……小澤、先生はお前のことをそこまで悪い生徒だとは思っていないんだがな。欠席するということは入学当時よくあったが、あれは体調を悪くしてのことなんだろう？ 体調を治してからというもの、いきなり5〜6時間目ほとんどまるまるサボったそうじゃないか……」

……今日は本当に嫌な事ばかり続いてしょうがないな。今朝に感じた嫌な胸騒ぎはこの事だったのか？ いや、もうどうだって良い。もうこれ以上変な事は起こらないだろう。いや起こらないでくれ、俺の体がこれ以上持ちそうにない。外側というよりも内面がな。どこぞの誰かさんみたく心臓に毛の生えたような、いやいや、心臓がゴキブリのような、そんな強靱な精神の持ち主じゃないんでね。

「……そうそう、平塚先生が言っていたぞ。サボってた理由が昼寝をしていたんだって？ 昨日、ちゃんと寝れてなかったのか？ 高校生になったからといって夜更かしはいかんぞ。夜更かしは。まだまだ育ち盛りの時期なんだからな、朝昼晩ちゃんと飯を食い、決まった時間にちゃんと寝るんだ。そうしないとちゃんと身長が伸びな

いぞ？ まあ、小澤はそんな高くもないが低くもないからもう伸びなくても良いかもなんてことを考えてるかもしれないが……そうだ、最近の若いもんはインスタント食品ばかり食べて……」

明日は土曜日か。それじゃ今日はぐっすりこっすり眠れるな。昨日、夜中までゲームをやっていたせいでなんだか体がダルイ。今日の色々といった出来事もその原因に多く含まれる事は間違いないが、だいたいあんなくだらない携帯ゲームに夢中になってしまった自分が本当に情けない。

一応ボクシングを主体としたゲームなんだが、ただ単にトレーナーのようなおっさんが（某有名漫画に出てくるような眼帯をした、とは言わない）ミットを持ち、「打てっ！」といった言葉が画面に出た瞬間に携帯の真ん中にある決定キーを押し、それをミスせず何回できるかを競うという、反射神経だけでやるようなゲームだ。こんな単純でくだらないゲームなんだが、意外にも単純なゲームほど面白かったりするなんていう罨に見事引っかかり何時間も没頭してしまったわけだ。しかも、ランキング形式になっており、だんだんやっていく内にコツがわかってきて、最終的には自分が50位以内に入ってしまうという、全くもって意味のない快拳をはたしてしまっわけだ。

我ながら、こんな無駄なことに労力を使うくらいなら1時間でも多く眠っておけば良かったと今更ながらも後悔する。

「……そろそろ梅雨の時期に入って、授業にも身が入らなくなるかもしれないが、それでも真面目に出るんだぞ？ そうだ、集中力が途切れてしまっつて言うんなら本を読んでみたらどうだ？ 本は良いぞお〜！ 活字に慣れ親しむつても立派な勉強のひとつだからな。そうだな、なんなら先生のおすすめの本を教えてやろう。先生はサスペンスやホラーも好きだし、だいたいのジャンルを好き嫌いせずに読んでるんだが。小澤にはそうだな、SFファンタジーなんてどう

だ？今の若いもんはこういうのが大好きだろう？それか、恋愛ものなんてどうだ？このジャンルは先生は少しばかり苦手なんだが……ん？」

ああ〜腹減ってきた。今日の夕飯はピーマンの肉詰め。それを食べるためだけに今日を生きてきたといつても過言ではない。

いや、言いすぎだったな。何故なのか知らないが母親の『それは美味だ。果てしなくジューシー、それでいて飽きのこない感覚を衝撃の輪廻へと突き落とすかのような、まるで核兵器を思わせるかのような破壊力。鮮やかな緑は女神の羽衣に包まれているかのごとく、その中には命が、味が、深みが、そうそれは、銀河を彷彿させるエクスタシー。』

と、言っていてだんだん訳がわからなくなってきたが、とにかくたまらなく美味しいのだ。何度が真似て作って見せたが、何か足りない。いや、美味しいことには美味しいんだが絶対的な何かが俺のは欠けてしまっている。奴め、一体どんな魔法を使ったと言っんだ。

「……おい、小澤。聞いているのか？」

日曜日辺りにでもまた挑戦してみるか？ いや、それもなんだか面倒くさいしな……だが、あの味を自分の手の内に秘めることができたとしたのなら、それはそれは至福な日々を過ごすことが出来る。母親にわざわざ作ってくださいなどと懇願する必要さえ無くなるのだからな。いつそのこと調理方法を伝授してもらうか？ いやいや、あの母親のことだ。教えてほしいなどと吼えて見せたなら、にやりと笑ってあざけ笑うだろう。それだけは勘弁してほしい

「……おざわあっ！！話をきけええいつ！！」

「うわっあ、はいっ！すんませんっ」

斉藤の雷が落ちたんじゃないかと思うような馬鹿でかい声のせいで飛び上がりそうになった。心臓が飛び出るかと思ったよ。

顔を真っ赤にさせた斉藤は、何回か深呼吸をして気持ちを落ち着かせてから、ゆっくりと口を開く。

「……ふうっ、大きな声を出してすまない。先生ちょっと大人気なかったな。でもな小澤、人が話している時はちゃんと目を向け、耳をむけ、心で聞くんだけ。わかったか？」

「はい、すみません」

そう、無機質に答えるともう一度深いため息をこぼしてから、席を立ち窓の縁に手をかけぼんやりと外を見つめだした。夕日が当たり無駄なほど哀愁の感じるその背中を見て、なんだか俺の心は切なく……いや、どうでもいいから早く帰らせてくれ。

「……なあ、小澤。前々から思っていたんだが、何でお前はそんなにやる気がないんだ？」

いきなりの核心を突いた質問にぎくりとしてしまった。いや、なにが核心なのかはわからないが、なんとなく頭の中を覗かれたような気がして気分が悪い。

斉藤はそのまま顔を校庭に向けたまま続ける。

「いや、やる気のない生徒は他にもたくさんいる。……だけどお前はなんだかわざとそうしているような気がするんだ。違うか？」

さあ？どうだかね。

「いや、そんなことないと思いますけど……」

なんのことだかさっぱりと言った表情を作って見せる。すると、斉藤はいきなり表情を曇らせはじめ、小さな声でぼそつとつぶやく。

「……やっぱり、あいつのせいなのか？」

「あいつ、って？」

窓に向けていた顔が瞬時に俺に向けられ、強張るような真剣な表情で俺を見る。なんか気持ち悪いなあ。

「あいつと言ったらあいつしかいないだろう？……」松岡圭吾「お前の相棒のことだ」

「……はい？」

なんで松岡？……いやいやまず相棒と認めた覚えは一かけらもないんですが。

「あいつがお前に悪影響を与えているんじゃないか？と先生は思ってるんだが……違うか？」

はい、その通りです。ですからあいつを即刻退学処分にしてください。というかできるだけ目に届かないところにやってくれるなら、もうそれだけで最高ですっ！

と大きな声で訴えてやりたい所だが止めておこう。だいたいあいつに悪い影響を受けてるといふより、ただ単に、そして大いに迷惑被ってるだけと言ったほうが大いに正しい。

「松岡が、あいつがいるせいでお前は学校にも来るのが面倒で、授業を真面目に受けるのも嫌だからそんな風になっているんだらう?」

なにをいきなり勘違いをしているんだメタボリック?

た、し、か、に、今日もあいつの顔を見なければいけないと思うと、そりゃベッドから体を起こしたくなくなるわ、学校に行く足取りも重くなるわ、と感ずることもしばしばあるが、別にそれとやる気は関係ないだらうが。しかも、あいつは体育以外の授業中には比較的の良い奴になるんだがね。9割がた寝てるから。

「先生」

「なんだ?」

「考えすぎなんじゃないですか?」

とつとつ脳まで脂肪に汚染されてしまったんじゃないか?

「いや、あいつがいけないんだらう? 現に松岡は放課後、教室で待っていると言ったのにもかかわらずダツシュで逃げ帰ったじゃないか! お前も逃げようと思ったんだらう?」

勝手な憶測で判断するんじゃないメタボリック。俺はいち早く家に帰り、テレビなどをたしなみつつも夕食にいち早くありつきたかっただけだ。松岡の真似をして逃げるだなんて言語道断。俺は俺のため俺自身の判断で逃げたのさ。

じゃあ、なんでここにいるのかって? ……捕まったんだよ。松岡の奴め、音の壁を越えたと思えるんじゃないかと思うくらいの速さで教室から脱出してやがった。現に俺が見た時にはもう、教室から

姿を消していた。まるで、そこに最初からいなかったかのごとく…
…そうか、いなかったんだな。

「いや、あー……俺はトイレに行こうとしていただけですよ」

最後に苦し紛れの嘘を試してみる。あいつと一緒にされるとい
のが嫌だったんでな。いやもうこの際どうでもいいんだけどな。そ
う言つと、まだ「いや松岡が…」あーだのこーだのとぶつぶつぶ
やいている。

「だいたい、このメタボリックマシンはなんでこんな無駄に熱血な
んだよ。あんた担当教科は国語だろうが。国語の教師ってのは得て
してインテリ系って相場が決まってるだろうに。「趣味は読書にス
ポーツだ」なんて言ってることもあったが、じゃあなんだその腹は。
あんた体力ないだろうが。好きなスポーツ言っても温泉に行っ
たときに何故にか存在しているピンポンで一汗流しているくらい
のもんだろうが。しかもなんだ？なんでそんなに松岡に執着するん
だ？」

だんだん斉藤の松岡への訴えは激しさを増していく。

「絶対あいつがいけないんだ！絶対に。あいつはいきなりいたると
ころにいる女子にちよっかいを出して、あげくの果てには『松原先
生』にも手を出しやがったんだ！絶対にあいつがいけないんだ！ゆ
るせんぞおお！」

ああ、そういうことか。というより斉藤よ、キャラ変わってきて
ないか？

『松原先生』とは『松原 真知子』通称『マチコ先生』生徒（特に
男子）から大人気を誇る理科の教師のことだ。

『歩くグラビアアイドル』などの通り名を持つほどにナイスなボデ
ィー、さらにはロリコンマニアをくすぐるかのごとくの二十歳を超

えてもいまだに幼少期の面影が残るその幼げな顔は、まるで首から下だけ成長させてしまったのではないかと思えるほど。そして、あげくの果てには水素や炭素の『素』の部分を『す』と読んでしまい、『すいす、たんす』などと言ってしまっうほどの天然さを兼ね備えるという、もはや死角なしの奇跡の女教師。(よく教師になれたなというところで奇跡)普通なら大爆笑するところなのだが、それさえ惜しまれるほどの可愛さに男子諸君は涙ぐみながら頷くばかりだ。

松岡いわく、『蒼井 サクラ』が天の女神様なら、『松原 真知子』は地上の女神様らしい。

つまりは、こういうことだ。まあ、噂にもなっていたんだがメタボリック斉藤はマチコ先生にぞっこんということだ。そして、一時期暴走していた(episode 3 参照)松岡の馬鹿がマチコ先生に手を出して、(ただ単にむちゃくちゃな告白しただけだろうが)それを知った斉藤は個人的な怨みがあるというわけだ。

だが斉藤よ、あきらめた方が身のためだぞ。おまえなんぞにあのプリティーエンジェルは釣り合わなさ過ぎると言うものだ。せいぜい同僚という枠におさまって満足することだな。

それにしてもマチコ先生の事だから、あの馬鹿の無茶苦茶な自己中心的告白なんかでも、顔を真っ赤に火照らして必死に断ってくれたんだろうなあ……うんうん。あんな野郎のこと、空気のように扱ってくれても一向に構わないのに。

ん？ そういえばあの馬鹿。なんでいきなり暴走を止めたんだろ
うか？ いや、そりゃ止めてくれて幸いこの上ないんだが、あまりにもいきなりだったんで、少し気にはなるな。飽きたのか？ いや、たしかあの時なんだか様子がおかしかったような気が……まあ、どうでもいいことか。

さて……。

「あの、先生」

「……ぬわんだあっ!？」

いまだに一人でぶつぶつと喋っている、もうすでに野獣化してしまった哀れなメタボリックモンスターに声をかけると、目を血走らせながらも俺にその無惨な顔を向ける。

あんたが言いたいことは痛いくらいわかったよ。明日にでも、いや今すぐに松岡の家にも行ってそのうつぶんを晴らしてくれてもくれても構わない。なんなら病院送りくらいな犯罪めいたこともやっても良い、俺が許可しよう。

だから、ひとつだけ俺の頼みを聞いてほしい。

俺の願いはただひとつ。

「もう帰って良いですか？」

第八話『ラララブレター?』

ちらほらとしか生徒の姿が見えない玄関。もう、だいたいの生徒達は下校してしまっただろう。まだあたりは夕焼け色一色だが、そのうちすぐに真っ暗になってしまうだろう。本当だったら誰よりも早く家に帰りたいたいと思っていたのは自分だったのに、まさかこんな遅くなるとはな。

もう、ほとんど愚痴だらけの斉藤の長々とした説教（いや、あれは果たして説教と呼べるものなのか？）も終わり、やっと今玄関にたどり着いた俺はもうなんだか肉体的にも精神的にも疲れきっていた。やっと帰れるのかと思うと涙が出てきそうなものだ。

「ふうー……まあ、これで帰れるんだから良いか」

などとぼやきながら、自分の名前が記されたシールが貼ってある下駄箱を開ける。真ん中に薄いベニヤ板があり、上段と下段に分かれるように作られている。ついさきほどまで履いていたスリッパを上段に入れて下段の方に入っているスニーカーを取り出す。

「ん?」

はらり、と白い封筒のようなものが下駄箱から零れ落ちる。なんだこれは? 地面に落ちたそれを拾ってみる、なんだかこれと同じようなものを朝、誰かが見せてきたような気が……

「……まさか?」

やけに質素な作りではあったが例のものであるようにも見えるそれはまさに『ラブレター』に見えなくもない。

いや、まさかそんなはずが、などと恥ずかしくも、動揺してしまつたのかまたもやはらり、と地面に落としてしまつたそれをあわてて拾いあげる。

落ち着け、落ち着くんた俺。良く考えて見る。俺に好意を寄せていると思われる女性がいるか……？ 否っ！ 松岡の馬鹿のおかげで俺の評価はあいつほどでもないが、かなりの下位ランクに位置づけられているはずだ。俺に話しかけてくる女子おるか、ましてやラブレターなどもらえるはずもない。そうなれば、この中身はただひとつ。

「ふっ……」

質素な作りであるその白い封筒を今度は自ら地面に捨てる。

この俺を松岡の馬鹿と一緒にのレベルだと思われては困る、こんな紙切れなんぞに騙されるほど地に墮ちてはいない。俺はあくまでも正常の思考能力を持っているんでな、そのところは理解してほしいもんだ。

スニーカーに足を入れ、かかとが入るように地面につま先をコンコンと蹴る。もうだいたい履き古した白一色のスニーカーは汚れて、全体的に黄ばんでしまっていた。

「さて、行くか……」

右肩にスクールバッグを担ぎ、数歩歩くとピタッと俺は足を止めた。

ゆっくりと後ろを振り返ってみる。固いコンクリートの地面には似合わない白い封筒。何秒か睨みつけてから、近づき俺はそれをまた手に取った。

「……………」

もしかしたらってこともありえる。とほんの少しでも思ってしまったが最後、俺はもうすでにそれを取ってしまった。まあ、見るだけなら良いだろう。ひよっとしたらクラスの誰かが、少し前に俺が落とした小テストの用紙を拾ってくれていて、それをわざわざ封筒に包んで下駄箱に入れておいてくれたのかもしれない。面と向かって手渡しすれば良いことじゃないかと思うかもしれないが、何故だか前にも言った通り『馬鹿神松岡』のせいで俺は一般人の避けられる対象になっているのだよ。ちくしょう。

だから、どこかの心優しいクラスメイトが恐ろしくも思いながら下駄箱に入れておいてくれて……

「……いや、もう見よう」

無駄に考えるよりも中身を空けて見ることに決めた俺は、辺りをきよろきよろと見て周りを確認する。

誰かが、俺がどんな反応をするのか面白おかしく観察しているんじゃないかと思うと少し不安だったが、周りには誰もいないようだ。しかも誰がいようとどんな風に見ていようと関係ない。見るだけなんだからな。

ゆっくりと中身を開けて中の薄黄色がかった紙を取り出す。どうやら先日無くした小テストの用紙ではないようだ。胸が高鳴るのがわかる。なんでこんなに高鳴っているのかはよくわからないが、俺は一息ついてから半分に折りたたんである小さな紙を開いて見せた。

「……うん？」

予想通り、ではなく。予定通り、でもない。

とても微妙な内容がやけに達筆な字で書かれていた。それは松岡がうざったくも見せてきた誤字脱字のお祭り騒ぎな告白文とは違っ

ていた。

もちのろんの事、愛を伝えるために書かれた恋文とも違った。ただ短く、薄黄色がかった紙にはこう記されていた。

『この手紙を見たのなら、即刻屋上に来なさい』

名前も宛名も記されておらず、この一文だけが紙の中央に記されているだけだった。命令形なっているのが少し気にかかるところだが、そこまで考える必要もない。屋上に来なさい？ 馬鹿馬鹿しい。こんな悪戯まがいのわけのわからないものにわざわざ付き合っているほど俺は暇じゃない。だいたいせっかく降りてきた階段をまた登れと？ そうでなくても残り少ないヒットポイントに、とどめを射すつもりだと思えない。

「……………」

さて、帰ろっ……………」

「はああ〜……」

これでもかと大きなため息を吐きながら、何故だ、何故なんだ？と自問自答する。

俺の右手にはドアノブが握られている。鉄製の冷たい感触が少し心地よくも感じる。目のまえには所々塗装が剥がれ、サビがあらわになってしまっている。そう、これは屋上に出るためにある無駄に大きなドア。

何か期待があって来たわけじゃない、ただなんとなくだ。

昼飯時に屋上を使いたいと言う生徒は大勢いたが、安全のため鍵をかけられて教師以外入ることは出来ないはずだった。のだが、試しにドアノブを回してみると鍵がかかっているようには感じられなかった。

回したまま強めに押してみると、案の定ドアは何にも遮られずずんなり開いた。

意を決して外に出てみると、すでに夕日は半分ほど沈みかけていた。コケがかって全体的に緑色に汚れた地面、周りには所々穴の開いた今にも倒れてしまそうな無残なフェンス。これは教師たちが断固として開放してくれなかったのにも頷ける。あんなフェンスに寄りかかるものならば一瞬にして奈落の底に叩き落されるのは間違

いないだろう。顔面から固い地面に向かって「こんにちわ」だ。考えるだけで、怖くなってくるな。

背筋に冷たいものを感じながらもやっとここに来た意味を思い出す。だが、360度ぐるっと回ってみたが誰もそこにはいなかった。

「……誰もいないじゃねーか」

「やっと来ましたね」

ぎよっと、後ろを振り返ると、確実にさっき見た時はいなかった場所に悠然とした態度で俺を真っ直ぐに見据える少女がそこには立っていた。

沈みゆく夕日に照らされた、自然な茶髪はオレンジ色に染まってキラキラと光り、つい先ほど同じく夕日に照らされていたメタボリツク斉藤などは、比べる事すら罪に問われてもしようがないと感じるほど、びっくりするぐらい綺麗だった。

「あつ、蒼井サクラ……さん？」

意外以上に意外。目の前に立っているのはまぎれもない美少女、蒼井サクラだった。

「はい。いきなり呼び出してしまって申し訳ありません」

ペコッと軽く会釈して見せたが、その表情は全く変わらず少し冷たい印象を思わせる目でまた、真っ直ぐに見つめる。あまりにも真っ直ぐな目に俺はつい、目をそらす。

「いや、別に構わないけど……一体用件はなんですか？」

風が吹くと、長めのフワフワと柔らかそうな髪が揺れた。彼女は少し間をあけてから、小さな唇を開き言い放つ。

「見ましたよね？」

「……はい？ なんのことですか？」

いきなりのクエスチョンに俺の頭にもクエスチョンマークが浮かび上がる。見ました？ 一体何のことだろうか？ 何か俺はいけないものを見てしまったのか？

彼女はまた少し間をあけて、今度は少し強めの口調で聞いてくる。

「……先ほどの私を見たのでしょうか？」

あつ。

つい、口に出してしまいそうになったが、彼女がやっとなんのことを指しているのか気づく。

三時間目が終わって中休みに入った頃、松岡と昼飯を買いに売店に行った時に起こった、『あの出来事』のことだろう。ただの俺の疲れからくる妄想だと思おうとしていたが、やっぱり現実のことだったのか？ いや、でもありえない、あんなこと。

頭の中での光景が生々しく蘇る。

「いや、見たってほどちゃんと見たわけじゃないんですけど……」

やや濁しながらそう答える。ひよっとしたら他の事を指しているのかもしれない。または誰かと間違えているのかも知れないし………ん？

ズバンッ！

右足をゆっくり十数センチほど上げたかと思っただその瞬間、思いっきり地面に叩きつけて、こだまするくらいに大きな音を辺りに響かせる。あまりの音の大きさに一瞬何か爆発したんじゃないかと思っただけだ。

……
いや、やっぱり爆発したようだ。

さっきまでのおしとやかな顔からうって変わり、明らかに怒りをあらわにした顔つきで、人差し指を突きつけて言い放つ。

「あー、見たんでしょっ！わかってんだからっ、あんた即刻死刑ね」

はっ？

いきなり何を言うんだこの美少女は、ってか口調&表情変わりすぎじゃないか？ 二重人格？ いやいや、それよりも死刑ってなんだよ？最近の女子高生で流行ってる冗談か何か？

こちらが何か弁解をしようとする前に、目の前の美少女は俺に手をふりかざし、冷たい眼光で一言投げつける。

「死になさい」

「いや、死になさいっていきなり言われても……へっ？」

冷たい口調でそう言い放った瞬間、その小さな雪のような白い手のひらから魔方陣のようなものが浮かび上がり真っ赤に燃え上がる炎のようなものが現れ、ごうごうと激しい音を立てながら瞬時に俺に襲いかかる。

「……うっ嘘だろ？」

逃げるといふ選択肢があまりにもとっさのことで思いつかず、襲いかかる火炎放射を瞳の中に映して、ただ呆然と立ちつくす事しかできなかった。

「うわああっ！？」

悲鳴をあげながら目をつぶり、その場でうずくまるようにしてしやがみこむ。一体なにが起こってるんだ！？ 何で俺はこんな状況にあってるんだ、どうすれば良い？ 俺は、死ぬのか？ 思考回路が大暴走して今にも死にそうな中、ひとつだけ気づけたことがあった。

誰かつ！ 助けてくれえっ！ 熱いっ熱いっ、あっ……………

「……くない？」

数秒間そうしていると、体中を包んでいたぬるい熱気のようなものは消えたらしく、少し火照った体を涼しい風が吹きぬけ冷ましてくれた。

恐る恐るゆっくりと目を開けてみると、先ほど目の当たりにした炎は跡形も無く消えて、目の前には変わらずに5、6メートル離れた場所に可憐な美少女……いや、鬼のような表情をした美少女が立っている。

「ちっ」

明らかに聞こえる程度の大きさで舌打ちをつきながら、俺を睨みつける。

かろうじて腰は抜けていなかったようだったので、なんとか体を奮い立たせることはできた。体中あちこち見てみたが、どこにも燃えた後などなくそれどころか焦げついた後すら一箇所もなかった。

「なんだこれは……？」

疑問の表情を投げかけようと顔を上げてみると、すでにこちらに向かつて再度手を振りかざしている美少女の姿が。

「じゃあ、これならどうよっ！」

「いやいや、『じゃあ、これなら』ってあんた……」

手のひらから浮かび上がる魔方陣からニヨキニヨキとつららの形をした無数の氷のヤリが現れ、ものすごいスピードで俺に向かつて飛んでくる。

「うおおあぁっ！？」

さすがに今度は反応することができたが、横に向かつてヘッドスライディングするようにしてなんとかかわせたのは最初の数本だけで、かわすと同時に手の平の方向を変えて放ってくる第二撃目をかわすことはできなかった。

鋭そうな何十本もある氷のヤリが俺の胸を、足を、腹を貫く。その箇所から波打つようにして血が溢れ出して、コケがかった地面を赤く染めていった。

になるはずなんだと思うんだが。

「なんだよこれ……？」

表現力が乏しく同じ言葉を発してしまった。

今度は目をつぶってなかった。というよりもつぶるヒマも無かったと言ったほうが正しいのだが、俺はこの目でしっかりを見た。あの簡単に人間など貫いてしまいそうな鋭くとがった氷のヤリのようなものが、俺の体に触れる瞬間に溶けて、消えて無くなるのを。

こりゃ、一体どういうことなんだ？ 俺は何か悪い夢でも見ているって言うのか。それとも日々のストレスのせいで、こんな幻覚を見てしまっているのか？ だとしたら誰か救急車を呼んでくれ！ 俺は重症らしい。

「もっつ！ 一体なんだって言うのよ!？」

俺に人差し指を突きつけて鋭い目つきで睨む。いや、ちょっと待ってくれそのセリフはたぶん俺が言ったほうが状況的にしっくりくると思うんだが？

「もう、怒ったわっ」

いや、だからそこで怒るのはちょっと理不尽すぎだと思いませんか？

今度はさっきのように手のひらをかざすだけではなく、万歳をしているように空に両手を伸ばすと、その小さな両手が白く光りだす。キィィイン、と何かが収束されているような音が耳に入る。手の周りの空間が不気味にうごめいているのがはつきりと見える。目を閉じたくなるくらいに白く光る両手の先には、野球ボールくらいの大きさの球体が浮かび始めた。まるで小さな太陽を思わせるくらい存在感が、俺の額に大粒の汗を流させた。

「……おっおいちよっちよっど待っててくれって!？」

今度のあれはちょっとヤバいんじゃないか？俺の第六感が悲鳴をあげている。だが、そうは思うとも体が動かない、足が可動しない。恐怖のせいなのか、それかこのどたん場で歩き方を忘れてしまったのか。

なんにしても、俺の人生はここで終わりだ。それもまた、俺の第六感が告げている。

「これで終わりよっ！」

高らかに声を上げて、にやりと皮肉な笑みをこぼす。

「くっらいなさいっ！」

「うわああっっ！！」

結局、一步も動けずにまたもやその場でうずくまる。

目をつぶると、大切な思い出から、たわいのないものまで、まるで火山が大噴火したかのように頭の中に勢いよく溢れ出す。という、走馬灯のようなものが見えるといった現象が起きるわけでもなかった。

ただ、恐怖で心底怯えてしまつて可笑しくなつてしまつたのか、それかパニック状態で思考が爆発してしまつたからなのかは定かではないが。こんな状態でありながらもひとつだけ頭に浮かんだ。

たぶん目をつぶる前、まるでゲームかアニメのワンシーンのような情景に映る蒼井サクラの表情を最後の瞬間に見てしまつたからだろう。こんな状況で不謹慎かもしれないが……いや、この際どうだって良い。

……

やっぱり笑った顔も可愛いじゃねーか。ちくしょう。

第九話 『天上天下唯我独尊』

俺の人生、ろくなもんじゃなかったな。まあ、別にそれほど未練というほどのものをこの世界に持つてはいやしなかったが、死にたくはない。しかも、こんなわけのわからない状況でだ。

俺の理想の死に方は、成人を越えて良い年になった娘や息子たちに囲まれながら妻よりも先に老衰で逝く、といったもんだ。だがそれも叶いそうもなさそうだ。

そんな後悔の念を頭の中で考えていると一つの救いの声が耳の中に飛び込んできた。

「お待ちくださいっ！お嬢様」

凜とした、かしまった男の声のする方に恐る恐る目を開けて現状を確認する。今だ、異様な白い光を放っている蒼井サクラの隣に立ち、その細腕を掴んで何やら絶対的に危ないものを今にも放とうとしている所を静止させているようだった。そして、その男の佇まいに少し驚くものがあった。小柄な感じを思わせる体系で髪型はオールバックの白髪。服装はいかにも、といったようなビシッとした黒のチョッキを着た執事スタイル。なかなか近隣ではお目にかかれない執事っぷりだ。

少し離れていて顔の方は良く見えないが、それなりに年配を思わせるしわがここからでも確認できる位深いものだった。

「いきなり何すんのよ！爺っ」

いきなり現れた爺と呼ばれた男は、申し訳なさそうな顔をしつつもその腕を放そうとはしなかった。すると、数秒経つと手から溢れ

んばかりに輝いていた光は少しずつ弱まっていき、そして消えた。
「離しなさいよ！」と掴まれていた腕を乱暴に引き剥がす。体制を整えてからキツときつい睨みをその男に向ける。

「私の邪魔をするなんて一体どういうことよ！爺っ」

鼻の下から顎にまで真っ白なヒゲを蓄えていて、小柄なサンタクコースのような印象を思わせる男は一度軽く頭を下げてから弁明を始める。

「申し訳ありませんお嬢様。ですが、このような所でその魔法を使うのはいささか危険でございます。しかも人間の子にそのような魔法を使えば、どのようになるかはお嬢様もお分かりでしょう」

なだめるような優しい口調で、言い聞かせる。それが気に食わなかったのか、ふんつと腕を前に組んでそっぽを向いて、まるで話を聞いてないような素振りを見せる。

なんだかわからないが俺はあの爺さんに助けられたらしい。ホツとしたら体の力が抜けてしまったらしくその場に尻餅をついてしまった、今度こそ腰が抜けたみたいだ。気づいてみたら全身が汗だく状態だった。校内マラソン大会でもこんな汗をかかないんじゃないだろうか。

体の中で大太鼓を鳴らしてるかのように心臓が大暴れしている。

「……ふんっ！ 平気に決まっているじゃない。アイツが『普通の人間じゃない』ってことくらい爺だつて気づいてるでしょ？ ほんつとむかつくのよ！」

「ですが、あのような魔法を使えばここ一帯がどうなるか……」

「爺。私を馬鹿にしてるの？ それくらい承知してるに決まってるでしょ！ 屋上の周りにちゃんと結界を張ってるから周りには影響は出ないわよ」

「……そうでしたか、それは申し訳ありません」

俺が必死になって心臓の暴動を鎮めている間に、とんでもない事を口走っているのが聞こえたような気がしたんだが……そのままスルーして良いんだよな？ 魔法？ 結界？ いやいや、一番ヘンテコな事は俺が『普通の人間じゃない』とか言っていた事だ。馬鹿言うな、俺は真正銘の何の変哲もない男子高校生だぞ？ 勉強も人並み、スポーツも人並み、やる気の無い普通の人間だ。

「……あんたら一体何者なんだ？ というか俺が『普通の人間じゃない』ってどういことなんだ？」

「あーうるさいわね。殺すわよ？」

はい、すみません。……いやいや負けるな頑張れ俺。

「お嬢様、説明の方をしてあげなければ……」

「はあ？ 面倒くさいわよ。なんでこんな頭の悪そうな奴にわざわざ私が説明しなきゃなんないのよ」

おい、今のは少し感に障ったぞ。外見だけで人の中身を勝手に判断してもらうのは止めていただきたいね。といっても並程度の頭脳しか持っていないから強くは言えないんだがな。というか俺の外見が頭が悪そうに見えたのがショックでしょうがない。

内心ムツとしている俺に気づいたのか、恐ろしく規則正しい歩き

方で腰が抜けて座り込んでしまっている俺に手を差し伸べながらニッコリと微笑む老人。

「それでは、私が説明しましょう。まず、何から答えましょうか？」

上質な絹のような肌触りの良い手袋をした手を握りなんとか立たせてもらうと、もう一度ニッコリと大きなシワを作りながら微笑む紳士的な振る舞いを見て、やっと俺は安心したのか体の震えが止まったことに気づく。ゆっくりと深呼吸をしていると「早くしなさいよ」と鋭い眼光つきの野次が奥の方から飛んできたが、無視して目の前に立っている小柄な老人に顔を向ける。

「じゃあ、まず『普通の人間じゃない』ってのはどういうことなんだ？」

「小澤様はあらゆる魔法の類を打ち消すことのできる反魔法体質の存在『アンチヒューマン』なのです」

…… why? えっと、もう一度わかりやすく答えてくれると嬉しいのですが。反魔法体質？ アンチヒューマン？ というかなんで爺さん俺の名前知ってるの？ ほんの少しも理解していないことを察したのか規則正しく頭を下げる。

「申し訳ありません。いきなりこのような話をしても理解できるはずがありませんでした。それでは私どもの素性から説明いたしますよう。まず、私はこの世界の住人ではございません。もちろんあなたらにおられるお嬢様もです」

そういつて手のひらで蒼井サクラを指して見せる。一方その本人は腕を組んでツカツカと片方のつま先で地面を叩いている。

視線を感じたのか、そこらにいる不良など一蹴できるくらいの睨みを利かせてきたので瞬時に視線を目の前の老人へと戻した。それを確認したのか、説明の続きを喋りだす。

「……『エクセルト』と呼ばれるこの世界とは別次元の世界から私共は来ました。この通り見た目などは小澤様のような人間となにも変わらないように見えますが、私どもは別種族の者です。そして、小澤様が先ほどなされたように魔法を自然に打ち消す事のできる存在を『アンチヒューマン』私達の世界で言う反魔法体質の存在と呼ばれる者なのです」

「はあ……」

「丁寧な説明になんとなく理解はしたが、理解していない。矛盾していると思うが今はそんな心境だ。」

つまりはこの爺さんの言う別次元の世界『エクセルト』とやらでは魔法やらなんやらが普通に存在していて、何らかの理由で二人はこちらの世界に来ているってことだろう。……でもまだ、納得できない。

「わかった。あなたの言うその世界の事やら魔法の事は百歩、いや万歩譲って認めよう。……だけど、なんで俺がその『アンチヒューマン』とやらなんだ？」

どこにでもいる、しがないサラリーマンの父親とちよつと頭の弱い母親から出来た俺がそんなわけのわからない物体なわけがない。

「それは……」

「あー長いわよ！説明がつ……爺、もう私帰るから」

まだ数分と経っていないが待ちきれなくなったのか、履き捨てるようにそう言つと右手を挙げて人差し指を立ててみせる。

「お待ちください！お嬢様！小澤様、申し訳ありません。後日詳細の方を……」

急ぎながらも最後まで丁寧に一礼をしてから、さつそつと駆け寄つて行く。身長が俺より小さいくらいの小柄な体をしている老人だったが、蒼井サクラの隣に立つといかに彼女が小柄なのかが際立つてわかる。

「あつ……」

瞬きをしたその瞬間、二人は跡形も無く消えてしまっていた。数十秒間、そのままボーっとしていると辺りが暗くなってきている事に気がつく。辺りを染めていた夕日はもうその姿を消してしまっていた。

「夢だつたんじゃないか？ そう思えるくらいに摩訶不思議なことがついさつきまでこの場所で行われてたとは思えないくらい何の痕跡もなかった。これも蒼井サクラ、あいつが言つてた『結界』とやらへの力なんだろうか？ あれだけ凄まじい炎が渦巻いたというのに、地面には焦げた跡すら残っていないかった。氷のヤリのようなやつだつて、地面やフェンスに直撃したはずだつてのに、どこにも穴の開いた箇所などなかった。見えるのは青々しいコケの絨毯とさびついたフェンスうくらいのものだつた。」

「……わけがわからない」

無駄に謎だけ残して勝手に去るなんてどれだけ理不尽な奴らなん

だ。というか本当にアレは蒼井サクラ本人なのか？ 別人にも程がある。いや、蒼井サクラがどんな奴なんだかさえ良く知らないんだから別人かどうかなんて事はわかるはずもないんだが……噂で聞いたような『蒼井サクラ』ではなかったな。あれが本当の姿なのか？ それとも実は双子で、今さつき出くわした理不尽極まりない美少女はその双子の片割れって事か？それか二重人格って事もありえる。

というよりも、なんだアンチヒューマンってのは？ 何故に俺がそんなわけのわからない生物なんだ？ しかも、もしそうだとしてみても何で殺されかけなきゃいけないんだ？ 俺はあんたらに怨みを買ったようなことは米粒ほどに思いつかないんだが、あの爺さんの言っていたナントカっていう世界では俺のような奴は存在しちゃういけないっていうのか？ 別に良いじゃないか、こつちの世界にはあんたらのような超常現象的な技を使える奴なんてそうそう……いや、いるはずもないんだからな。

クエスチョンの渦の中に巻き込まれてボーっとしている姿が滑稽に見えていたのか、いつの間にか一羽のカラスがフェンスの上止まって俺の事を凝視していた。黒豆のような真つ黒で小さな目が合う。少しの間睨み合いが続いた後、見下すようにひと鳴きしてみせながら悠々と頭上を飛び去って行った。

「……帰ろう」

どつと疲れを感じ、ふらふらと歩きながら出入り口の錆びたドアノブを握る。

「ちょっとあんなっ！」

「うわっ!?!?」

ヨロヨロと後ろに身じろぎながらなんとか尻餅をつくの避ける。ドアを開けてみるとそこにはついさつきまで理不尽なまでに超常現象を引き起こしてくれた張本人が現れたのである。腰に手を当て、眉間にしわを寄せながら目を釣り上げらせる。

「何びつくりしてんのよ？ダサいわね！」

普通いきなり消えた人がいきなり現れたら万国万民がびつくりするに決まっているだろうが。

こちらが何か言い返そうとする前よりも先に小さな唇が開く。

「まあ、いいわ。あんた、明日から私の下僕だからその所ちゃんと理解しときなさい」

「……はあ？」

つい、口からこぼれてしまった。何を考えているんだこの女は。

「その馬鹿面どうにかならないの？ ……あーそれと、私の命令は絶対だから」

「……いや、ちょっと待て！ 全く理解不能なんだが」

と言い終わる頃にはその姿は見えなくなっていた。空しく自分の声だけが階段の響く。ゲボクってなんだ？ まさか付き従える者とかそういう意味を持つ下僕の事か？ というか俺の知識には決してそうであってほしくないんだが、その意味しか思い浮かばない。

「……下僕？ 全くわけわからんっ！？」

第十話『小澤家の食卓』

校門を出ると、外の空気がやけに湿っぽく感じられた。空も曇り始めていて気分も優れない。すっかり暗くなった夜道を一人歩きながら考えても何の答えも見つからない。ただ、難解な数学の問題よりも遥かに難しいという事だけははっきりとわかる。いや、解けなくても良いから今すぐにも投げ出してしまいたいというのが本音のところだった。なんてことはない。ただ、悩むのが面倒臭いからだ。

相当疲れたのか、やけに脚が重く感じられる。もちろん体の疲労というよりも精神的にだ。早く、フロにでも入って体も心もサッパリしたいものだ。そして、このすきっ腹に栄養のある食物を……あつ、そういえば今日の献立はアレだったか。それを思えば、こんな辛さなどなんの障害にもならない……とまではいかないが、ほんの少しでも早く帰りたい俺の脚を元氣付けてくれる活性剤にはなった。我が家が目と鼻の先くらいまで近くなった頃、鼻の頭にポタツ、と小さな水滴が落ちてきた。どんよりとした雲に覆われた空を見上げてみると、今度は狙ったんじゃないかと言いたくなるくらい、水滴が右目にダイレクトに落ちてきた。涙目になる右目をブレザーの袖で拭っていると、頭にポツ、ポツ、ポツ、とかなりの間隔を空けてだが小さな雫が落ちてきているのを感じる。

「雨が……」

何の狂いもなく季節通りに梅雨が近づいてきたんだな、と何故だかホツとする。それだけ日常に大きな変化が起きるということが嫌いだからなのかもしれない。春は桜が咲き、夏は暑く、秋は葉が紅葉し、冬は寒くあってほしい。決して桜が咲かない春や、凍えるような寒さの夏や、青々しい緑が目立つ秋や、灼熱のごとく暑い冬は

来ないでほしい。そんな超常現象は俺の体には合わない。普通で良いんだ、普通で。そりゃ人それぞれ違った考えの『普通』があるかも知れないが、その中でも一番平均的な普通が良い。まあ、ここまですぐとただの欲張りかもしれないが、別に構わないだろう？あるがまま自然を望んでいるんだから。

そんな俺の目の前にいきなり消えたり現れたり、炎を出したと思えば氷を出したりする美少女が現れたりしなくなっちゃって良いじゃないか。

「……………ただいま」

「おかえりなさい！」

つぶやくくらいに小さな声で言ったのにもかかわらず、リビングの方から大きな返事が返ってくる。ああ、美味そうな匂いが鼻に入り込んでくる。ツーンとくるスパイシーな香りが嗅覚をつつくように刺激してくる……………スパイシー？

駆け込むようにして台所に入ってみると、エプロンを肩から外そうとしている母親と鉢合わせになる。首をコキコキ鳴らして呆然と立ち尽くす俺に声をかける。

「あら、今日は遅かったのねえ？ちようどよく今カレーが出来たところだから早くお風呂に入ってさっぱりしてきなさい」

「ああ、わかった……………って今日の夕飯は例の『アレ』にするって言うてなかったっけ？」

「へ……………？」

数秒間、たつぷりと間を空けたと思えば、いきなり何かを思い出

したような表情を浮かべながらチラツと俺の方に目を向けてくる。

「えーっとね……あつ、今日はミユがどうしてもカレーが食べたいっ！ カレーを食べないと死んでやるっ！ って言ってたからしょうがなく、ね」

「えっ？ 私、そんなこと言っていないよぉ？」

グッドタイミングで現れた我が妹ミユ。目を泳がすようにしてひゅーひゅーと適当な口笛を吹き始める。なんてわかりやすいのだろうか、この母親は。

「……忘れてたろ？」

ぎろりと睨みつけると、頭に手を置いて舌をペロっとしてみせる。いやいや年を考えてくれ母さんや。

「悪気があつたわけじゃないのよぉ？ 本当にすっかりこっぴどり忘れちゃってたの。それにしてもシユウちゃん、本当にピーマンの肉詰めが好きなのねえ」

「……だから、シユウちゃんって呼ぶなっっていうも言ってるだろ」

うふふっ。と母親特有の微笑みを見せながら台所へと逃げていく。修平、というれっきとした名前があるのにもかかわらず、何故にか母親はシユウちゃんと幼い頃からそう呼んでいた。まず、名前を略している部分までは許そう、いかにせん許せないのは『ちゃん』付けられている事だ。中学に入る前からその呼び方は止めてくれと頼んだが、全く持って効果はなかった。むしろその反応が楽しかったのか、余計にエスカレートしていく一方だ。

「ねえねえっ！ シュウちゃん、お母さんと何の話してたのー？」

可愛らしい我が妹が服の裾を引つ張りながら聞いてくる。ああ、母親がああ呼び方さえしていなければ今頃は、ちゃんと『お兄ちゃん』と呼んでいてくれたに違いない。そんな可愛らしい妹を、何でもない横に流しつつ風呂場へと向かった。

「ふうふう〜……………」

軽く体を洗い流してから、ゆっくりと白濁色の湯船に入る。熱さがジューツと体に染み渡っていくようなこの感覚がたまらない。

一瞬の幸せを楽しんでいると、入浴剤によるものであるう妙に甘い香りが嫌に鼻につつかかった。一体なんの香りなんだろうと考えるよりも先に今日の朝、朝食のパンを口に行っている時に母親が得意げに話していたのを思い出す。

『ほら、見てシュウちゃん！ 』疲れきった体に甘美なるひと時をあなたに。牧場の最高級の白い蜜をあなたの体の隅々まで……………』え？ 一体これがなんだって？ ジャジャーン！ これは北海道から取

り寄せた最高級品のミルク風味の入浴剤なのよ！何が凄いのってな
んと果汁100%なのよ！もう、夜のお風呂が待ち遠しいわあ！
もういつそのこと入っちゃおうかしら。……え？ いくらしたの
かって？ ……えーっと、そっそれは……』

「はあああ〜……………」

今日、一体何度目のため息だろうか。どこで見つけてきたという
んだ？ こんなまがい物。だいたい果汁100%の時点でおかしい
だろう？ もし、そうだとしてもそれじゃあただの牛乳を湯船に入
れた牛乳風呂と変わらなくなるんだから。しかも確実に果汁ではな
い。体に影響はないだろうか？ 怪しい商品なだけに心配になっ
てくる。

最近、ネット通販がマイブームらしく、週に一度、わけのわから
ない商品を購入しては得意げに見せびらかしてくる。今回のように
良かった商品だった試しがないというのに、何故か満足そうなのが
いけない。このやけに匂いが強い、胡散臭い入浴剤はいくらしたん
だ？ 最後まで「内緒よ」とか言って値段を言わなかったが、最高
級品とか言っただけだったか？ そんな無駄遣いして家計の方は大丈夫
なのか？

軽く背筋が冷たくなるのを感じながらも湯船から出ると、不思議
とさつきまで感じていた疲労感が嘘のように……なんてことはまる
でない。

「あつ、シユウちゃん。お風呂どうだった？ 気持ちよかったですよ
〜？」

テーブルに皿を並べながら、満面の笑みで聞いてくる。ああ、び
っくりするぐらい気分が悪くなったよ。きつい甘い香りのせいで頭

がくらくらする。すつきりもさっぱりも疲れもとれない風呂なんて、何の利用価値もない。そしてリビングに広がるカレーの甘い匂いがさらに胸の辺りをえぐるかのごとく……ん？ カレーってこんな甘い匂いしたか？

「……っげ!？」

目の前に並ばれたカレーライスほんの少し、じゃなくてかなり黒めに見えるのは気のせいだろうか？そして、なんだか嗅ぎ覚えのある甘い香りが気になるんですが。

「わあっ！ 美味しそーう！」

ミユがびよんぴよん飛び跳ねながら喜んでいる。妹よ、この異臭に気づかないのか？カレーにあっちゃんいけない甘い香りがこの空間を覆いつくしているだろう？

だが、おかしいといった様子もなくまるでこれで良いんだと言わんばかりに満面の笑顔で椅子に座り、いただきますの合図を待っている。

「もうちよつと待っててねえ、あらシユウちゃん？ そんなところにボサツと立ってないで座りなさいな」

せつせと、大きなお皿に山のようなサラダを盛り付けている。ドレッシングを青じそかシーザーで迷っているらしく、目の前に二本並べて腕を組んで首をかしげている。

「んん、どうしようっかなあ……ねえ、シユウちゃんはどっちが良い？青じそ？シーザードレッシング？」

「俺は基本的にサラダには青じそドレッシングだから、でもたまにはシーザードレッシングも良いかもな……ってそうじゃなくて、部屋の中に荒れ狂っているこの甘い匂いは何だ!？」

「へ?カレーよ?」

きよとん、とした顔で当たり前のごとく言う。へ?じゃない。

「そんなのはわかってる。そうじゃなくて、何でカレーからこんな甘い匂いがするんだって聞いているんだ」

「はいはいっ!ミユだよ」

問い詰める俺の背後で手を挙げて、ニコニコ笑っているミユ。それに合わせるように母親も笑い出す。

「うふふ、そうよね〜ミユが最後に味付けしたんだもんねえ?」

「えへへ〜ミユ特製の隠し味だよ」

……そうか、ミユ。犯人はお前だったのか。しかも、全く隠れている様子が見えないんだが? これじゃ頭隠して尻隠さず所か、頭隠さず尻も隠さずもう全部見せちゃえ状態だぞ。もう一度、ミユの目の前に盛られた黒色が強めなカレーライスを目に写してみる。かなりパンチがあるのは確かだ。

「えへへ〜さてシユウちゃん、ここで問題です!ミユが入れた隠し味とはなんのことでしょう?」

「……さあってなんだろうなあ」

わかってる。わかってはいるが、あまりの隠れていないこの現
状に今、俺は戸惑ってしまう。

「え〜っとそれじゃあヒントあげるね！ ヒントは……甘いもの！」

そりゃそうだろう。これで甘い物以外が入っていなかったらカレー
ーの存在理由を否定するのも同然だろう。インド人に軽くケンカを
売ってるようなもんだ。

「……うーんわからないなあ」

腐っても私、小澤修平はこの可愛い妹の兄であるので、降参といっ
た風におどけてみせる。

「えーシユウちゃんわからないのぉ？ でも、隠し味だからわから
ないのはしょうがないよね！ それじゃあ、特別に教えてあげる！
答えはチヨコレートでしたあっ！」

おお、そうだったのか。まったく見当もつかなかったよ、こりゃ
お兄ちゃん一本取られちゃったなあ。 なわけないだろう。わかっ
ていたさ、わからない奴がいるのならそれこそ俺はびっくりたまげ
たもんだ。異臭ともいえる位のこのカカロの甘い香り、変色してし
まったんじゃないかと思えるほどのカレーの色。まぎれもなくデイ
スイズアチヨコレート。

「あら、シユウちゃんどこに行くのかしら？」

「……もう寝る」

空腹を凌駕した疲れが自動的に体をベッドのある自分の部屋へと動かせる。今の俺があんなものを食ったら発狂しかねん。

「シユウちゃん、食べなきゃだめよ？」

誰が食うかそんなチョコレートカレー。いや、むしろチョコレート。無視を決め込み歩き出す、さあ行こう安らぎの園へ。

「え？シユウちゃん、食べないの……？ミユの特製カレー」

泣きそうな声が頭の中に響く。ぴたりと足が止まる。後ろを振り返ると今にも泣きそうな顔をしたミユが俺を見つめ訴えてくる。そして、その手には真っ黒な物体が乗ったスプーンが握り締められていた。

「……わかったよ」

言うまでもなく、それから1時間ほどかけて完食を成し遂げた俺

は、吐き気という魔物と戦いながら歯を磨く事さえ忘れ、やつと
ことで安らぎの園（自分の部屋）へとたどり着いた。

のだが、ベッドに寝転がるも胃の辺りに渦巻く酷い不快感が、安
らかな眠りにつかせるのを強制的に拒否反応起こしていた。それか
らさらに一時間くらい経つとそれも少し収まり、なんとか眠りに
つくことに成功した。

のだがそれもつかの間、今度は悪夢という恐ろしい鬼が舞い降り
る。

燃えさかる炎や鋭い槍のような氷が四方八方から襲いかかってく
るのを必死に逃げる、果てしなく逃げ続ける。どんなに必死に逃げ
ようとも執拗に追いかけて回され、最後にはアイツに捕まりこう宣言
される。

『あんだ、明日から私の下僕だから……下僕だから……下僕だから

……

』

『つつわあああああ………

』

こんな風にして俺の世界の崩壊は始まった。

拒否権なんて存在するわけもなく、強制的に壊されていく一方の俺の平凡で平和な世界。

もし、神様なんて奴が存在するとしたのなら、もしこれがアంతアの暇つぶしで起こした出来事であるのなら、ぜひとも戻していただきたい。戻してくれるなら、一日三回のお祈りを毎日かささず行ってやるから。腹が減ったというのならまんじゅうでも供えてやろう。ついでにお茶なんかもつけてやろう。

だから返してくれ。

俺の、普通な世界を。

第十話『小澤家の食卓』（後書き）

ここまで読んで頂き嬉しく思います。風来竜です。

一応、これで第一章が終わったといったところでしょうか。

……長っ！？と思った方はたくさんいたと思います。はい、無駄に長いです。

でも、なんというかこの無駄な長さが嫌いじゃない自分もいたりいなかったりなわけでございます。

とりあえず、ここからやつのことで学校のマドンナこと異世界から来た魔法少女こと蒼井サクラと強制的に関わっていくことになるわけですが、さーっていったいどうなるんでしょうね？

それでは、引き続き楽しんでくれると嬉しくってしようがないです。感想などもらえれば色々と励みになりますので、よかったですらお願いします。

第十一話『ある雨の日のこと』

今日は雨だ。どんよりとした雲が空一面に漂い、地上に小さな雫を何千、何万、何億とひっきりなりしに降らせている。

家に何本かあった内の一番綺麗なビニール傘を差して、降り注ぐ雫を退けながら歩きなれた道を歩いていると、お揃いの水色のカッパを着た少年と少女が嬉しそうに手を繋いで歩いている。兄弟なのだろうか、それともご近所同士の仲の良い友達なのかもしれない。まだ新しめの長靴でわざと水溜りに入ったりして嬉しそうにキヤツキヤツと楽しんでいる。

基本的に俺は雨が嫌いだ。そりゃ、さっき見かけた少年少女のように幼い頃は雨が降り出したと同時に外に飛び出して、キヤツキヤツと楽しく遊んでいたのかも लेकिन、今は違う。何故かはわからないが年を取ると共に雨が嫌いになっていった。というよりもこの年にもなれば雨の日は好きだなんていう日本人はそうそういないんじゃないだろうか？ 農業などの仕事に就いてる人など、特定の人以外は。夏のうだるような強い日照りが続いた日に突然降る雨なんかは、鬱陶しいと思う反面、気持ち良いと思うこともあるが。それ以外は別だ。しかも、いまの時期の雨は最悪というより他にない。じめじめとした感触が肌にまとわりついて離れないようなこの気だるさがどうにも鬱陶しい。

この梅雨の時期の雨は日本人の誰もが好まないだろう。好きだという人がもし、この日本にいたとしたなら、生涯顔を合わせたことはないな。絶対に気が合うとは思えない。

「しゅうへ〜い！おーいしゅうへ〜い！」

朝っぱらから聞きたくない声ぶつちぎりナンバー1が傘も差さず走り寄ってくる。

「おはようっ！しゅっへい！」

毛先から雫がぼたぼたと垂れ落ちている。ワイシャツもズボンも上から下までびしょ濡れになっていてなんと無様な姿だ。

「……おい。なんで傘差してないんだよ？まさか「雨が降ってることに気づいていなかった」なんてオチじゃないだろうな」

こいつだったらありえない話じゃない。びしょ濡れになりながらも笑顔で親指をぐっと立てる。

「そりゃあ、俺ってば雨大好き人間だからさあ！特にこの季節の雨は大好物さあ！」

どんなスーパーコンピューターを用いても理解不能だろう。やはり、お前とは一発気が合いそうもないな。むしろ合いたいと思ったことなど一度もないのでこの上なく幸いだ。

「だからってびしょ濡れになることはないだろう？」

「そりゃあ、久しぶりの雨だからさあっ！うっん気持ち良い」

まるで答えになっていない。久しぶりの雨はびしょ濡れにならないといけないなんて常識、俺の辞書には存在しない。いっそのこと野生に帰ったらどうだ？それの方が地域の住民が助かるってものだ。特に、俺がな。

そんな雨男、雨大好き人間、つまりはバカを横に、通学路をいつも通りに歩く。こうしていると、二日前、土日の連休に入る前に起きた出来事がまるで嘘のようだ。というより嘘であってほしいのだ

が……いや、実際は夢だったんじゃないか？

学年の神がかりアイドル的存在がいきなり消えたり現れたり、火を出したり氷を出したり、変な爺さん助けに入って来たり、あげくの果てには自分はこの世界の者じゃないとか、ナントカ言い出したと思いきや、今度は俺を奴隷にするだのなんだの……よくよく考えて見ればありえる話のわけがない。

ここはそんな超常現象なんて無縁の地球で日本で平和な町、榊町だぞ？ 銀行強盗や引ったくりの類さえ起こらない位、馬鹿みたいに平和な榊町なんだぞ？ あはは、俺もゲームのやりすぎで変な夢でも見たに違いない。

「うーん？ あらら、また修平ってば難しい顔してるなあ？」

「……いや、気のせいだ」

夢を見た。気のせいだ。ああ、嫌でもそう思いたい。

「……………ということであって、この文章には作者のこういった思いが込められているというわけだ」

いつも通りメタボリックな斉藤のメタボリックな声を聞き流し、うわの空状態で国語の授業の時間が過ぎていく。外を見てみるとどんよりとした雲が休む事なく雨を降らせていた。

校庭に大きな水溜りが出来ている。もう、あそこまで行くと沼か

池のようだな。まあ、お子様達にとっては樂園のようなものだろう。ふっ、と今朝、登校中に見かけた少年少女の姿が思い浮かぶ。きっとあの子らも長靴を履いて、色とりどりのカッパを着て泥まみれになりながら思う存分遊び、家に帰ると母親にきつく叱られたりするのだろう。俺がそうだったからな。

色々と考えすぎて靄がかかったようなぼーとした頭にはそんなどうでもよいような事が思い浮かぶ。

「おい、小澤。ぼけーつと外ばかり見てないで集中しろ」

「あっ、はい。すみません」

素っ気のない返事をして黒板に向き直る。そういえば、斉藤の奴はこの連休の間に松岡に復讐(?)してやったのだろうか？ まあ、朝っぱらからのあの馬鹿っぷりは何もなかったということなんだろう。ひよっとしたら何かしらあったのかもしれないが本人は全く気づいていない、なんていう落ちだろう。斉藤よ、今度は殺す気でないかとダメだぞ。

「あーそれじゃ、小澤。87ページの4行目から読んでくれ」

「…………え？ あっはい」

いきなりの無茶振りに…………いや、今は授業中なんだから無茶振りでもなんでもないんだが、いそいで87ページを開く。

「4行目、4行目、えーつと…………後ろを振り返ると、そこには少女の姿があった。その姿を目に捉えた途端に喉の奥が熱くなる。景色が滲んでくる。私は少女に聞かなければいけない事があった。涙が溢れ出そうなのを必死に堪えて、まるで自分に言い聞かせるよう

に、ゆつくりと、口を開いた。『4時間目が終わり次第、屋上に即刻来なさい』そう聞くと少女は陰鬱な表情で私の事を見つめて、ニコリと笑った……………は?」

今、わけのわからない文章がさりげなく混ざっていたような気がしたのは気のせいか?

「うん? おーい、小澤。一体どこを読んでるんだ……………まあ、いい。次の所を……………ってたまには真面目に授業を受けろおおっ! 松岡ああっ!」

「はうん?……………いんやあ……………そんなにサイン書けないからあ……………ちゃんと並んでくれえ……………ムニヤ」

幸せそうに寝言をつぶやく松岡に対して、斉藤は今にも飛びかからんと言わんばかりに顔を真っ赤にさせながら、なんとか留まる。

まあ、毎度毎度一番前の真ん中(つまり、教師の目の前)の席で堂々と寝られてちゃ、どの教科の先生も怒り出してもおかしくないだろう。ましてや斉藤なんてわけのわからん怨みパワーまで追加されているんだから尚更だ。

「くううつつ! 全くもってお前は何のために学校に来ているんだ! もう良いっ! 次、岡島っ!」

「はい。……………お姉ちゃんは どうしてそう思うの?」表情を変えずに淡々とした口調で聞き返してくる。私は……………」

何事もないまま進んでいるが、さっきのは一体なんだったんだ? 屋上に来いだとか書いてなかったか? 途端に頭の中に『アイツ』の顔が浮かび上がる。……………いや、きつとなんかの間違いだ。これは

きつとノイローゼかなんかで変な文章に見えてしまったただけなんだ。うん、きつとそうだったに違いない。

改めて87ページを見直してみたが、そんな文章はどこにも……

「……………うわっ!?!」

驚きの余りにつついっし声を出してしまった。国語の教科書がバサバサツと音を立てて地面に落ちる。

突然の奇声にもちろんのこと皆の視線が自分に集まる。斉藤なんか目をぱちくりさせながら呆然とする始末だ。

「……………どうしたんだ、小澤?ゴキブリでも出たか?」

周りの女子が小さな悲鳴を上げる。いやいやゴキブリ程度ならどんなにマシだったろうか。

「……………いや、何でもありません」

そうか? と余り気にしない素振りを見せて、朗読を再開させる。俺はみんなの視線が教科書に戻ったのを確認した後、地面に落とし教科書を拾うと、恐る恐るページを開いて見る。

「……………なんだよ、これ?」

『4時間目が終わり次第、即刻屋上に来なさい』

文字がなんだかばやけて見えると思った瞬間、ページぎっしりと『コレ』が浮かび上がりつついつい声を上げてしまったというわけだ。もしや、と思いぺらぺらと違うページもめくってみたが、全てのページにぎっしり延々と書かれていた。なんかの暗号だと思えな

い。
……『アイツ』だ。

思わず身震いしてしまう。4時間目終わり次第に屋上だつて？

一体今度は何だつて言うんだ。また、先週のような事をされるのは一生ゴメンだぞ？ あれやこれやと拷問のようなイメージが浮かぶ中、良い考えが思いつく。

うん、早退しよう。

アイツを回避するのはこれしかない。こんな死刑宣告みたいな命令は逃げるが勝ちだ。いかにも調子悪そうな顔をして斉藤に「すいません、具合悪いんで……」とか何とか申し出て、保健室に行き、早退許可書を書いてもらい逃げ延びるしかない。そうとなれば、決断した俺は頃合を見計らいゆっくり手を挙げる。

「ん？どうした？」

「あの……」

我ながらいかにも、な顔を装っているその時、開かれていたページの文字が激しく動き出すのに気づいた。文字が変化したりバラバラになったかと思いきや、ピタッと動きを止めた文字達の配列を見て、愕然とする。

『逃げようなんて思わないこと。殺すわよっ。』

口を開けたまま体が緊急停止する。延々と羅列している文字達がまるで悪魔のように見える。

「おいおい小澤。今度は一体何だって言うんだ？ クモか？ それともムカデでも出たのか？」

ムカデ？ クモ？ そんなの可愛いもんだらう。

「あの……」

「だから、何だ？」

逃げる逃げる、と緊急避難信号が身体のいたるところから発信しているのを、無視する形で搾り出すように、俺は斉藤に告げる。

「……トイレ行って来て良いですか？」

第十二話 『天気予報』

俺は今、ゆっくりと一段、一段確実にかつ悩みながら上っている。たまに下がったりもしている。まさか地獄が上にあるだなんて思いもしなかったさ。

はて、さて。

何故に俺はわざわざ地獄に足を踏み入れようとしているのだろうか。止めれば良いじゃないか。

……否。止めるも地獄、行くも地獄とまさに生き地獄。

「さつきから何やってるんだあしゆうへえ？」

「うおわっ！？ ……っってお前か」

「階段を上ったり降りたりして、変だぞ？」

確かに変な行動をしていたかもしれないが、お前に変人扱いされてしまったらもう世間の目がある場所で生きていける自信がないな。

「なあ、どこに行こうとしてるんだあ？ いつもの場所で一緒に飯食おうぜえい！」

はあ、もうすでにお前にとってもうあの場所は『いつもの場所』になってしまっているんだな。まあもう良ささ。

「いや、ちょっと用事があるからさ。先に行つててくれないか」

「おうっ！ わかった……でも修平、用事ってなんだ？」

「いや、えつと、あつあれだよ。ちょっとさっきの授業でわからなかったところがあつたから先生に聞くところだと思つてな」

何故にこういう時に限つて感じが良いんだろうか？ まさかこれからお前の大好きなマドンナに会いに行きます。だなんて口が裂けても言えないしな。しかもあの子は他の世界から来た魔法少女なんだ。なんていつたら好奇心のパロメーターが振り切つてどんな行動を起こすかわからないからな。

「……そうかあ、でも屋上には先生いないぞ？ 職員室は下だろお？」

確かにその通り。この階段を上によつても普段は硬く閉ざされているはずの無駄にでかいトビラがあるだけだ。職員室は一階にしかない。しかし、何故だ？ 何故こういうときに限つて鋭いんだお前は。

「わかつてるつて、ただちよつと階段を上つてみたい時期だつただけだよ。そういう年頃なんだ」

階段の角にこめかみをぶつけて死にたくなるな。我ながら人生で一番下手な誤魔化し方だつただろう。

「あつわかるわかる！ そうか修平は今そういう時期なんだな？ うん、ならしょうがない、しょうがない」

俺の人生、最大の馬鹿野郎はお前に決定だ。

「そんじゃ、早く用事済ませて早く来いよお！ それと一つアド

バイス。『階段は上って、初めて降りることが出来る』だあゝこれをいつも胸にいいゝ……」

わけのわからないことを大声で叫びながら走り去っていく。無論、途中から他人モードに切り替えていたのはいうまでも無い。

「さつてと……」

邪魔者もいなくなったし、さあ無謀な戦いに挑むとするか。RPGのラスボスに素手で立ち向かっているようなもんだ。しかも相手は強大で凶悪。たまつたもんじゃない。

恐る恐る階段を上る。目の前に鉄の扉が立ちはだかる。ドアノブを握りひねってみる。普通だったらこのまま押しても開かないはずなんだが、少し力を入れてみると少しだけ開く。太陽の光がほんの少しだけ入り込んでくる。ゆっくりまた閉める。

「……よし、帰るか！」

挑むどころかすでに心が折れてしまいそうだ。この扉を開けたらどんな地獄が待ち受けているのか考えるだけでも恐ろしい。先日あの光景が思い浮かぶ。あんなのいきなりくらったらトラウマになってもおかしくないだろう？

俺は、ゆっくりと深呼吸をする。

まあ、よく考えてもみる。ひよっとしたら中に入れば、無駄にでかく『どつきり！』と書かれたプラカードを持ったクラスの連中が居て、『じゃじゃーんっ！どつきりでしたあ！』みたいな、微笑ましい現実が待っているに違いない。あの魔法やらなんやらは全部、映研（映画研究部）から借りてきたハイテクな機材で見せた、CGだったんだろう。そう、映研の奴らネタが無いからって俺をダシにして無駄に金をかけたドツキり映画を撮って楽しんでいたんだ。あ

いつら（実際、顔も見たこともない）金持ち集団だつて噂を聞いたことがあるしな。うん、そうだ。絶対にそくに違いない。

「どうかいたしましたか？」

「うわぁあつ!?!」

いつの間にか、目の前にはビシッと決まっている執事スタイルの爺が立っていた。不自然なくらい目の前に。

「近いつて!?!? じゃなくていきなり現れるのだけは止めてくれ」

明らかに心臓によろしくない。

「それは、申し訳ありませんでした……それでは、どうぞ」

そう言うと、にっこり笑って、あの重い鉄の扉を軽々と開き、俺を招き入れる。心なしかその笑顔が怖く見えたのは何故だろうか？

「……あれ？」

雨が止んでいる。いつの間に止んでしまったんだろうか。空を見上げてみると、それはそれは不思議な光景が目に入った。

空は晴れていた。そこは何も可笑しくない。可笑しいのは、屋上の形に切り取るかのように、その部分だけ晴れていることだ。周りを見てみると、今朝、登校しているときに見た空と同じ様に、どんよりとした雨雲が空を埋め尽くし、小さな雫を降らしていた。

あまりにもおかしな光景に、俺の目の辺りからも小さな雫が零れ落ちてしまいそうだった。

「おそいつ!」

「ぐはあっ!?!」

突然、背中に強い衝撃が走り、俺の体は前につんのめる。かすかに甘い香りが鼻のなかを泳ぎだす。

「いつつつ、いきなり何すんだよ!?!」

振り返ってみると、そこには鬼のような表情をした美少女が……いや、もう鬼で良いだろう。腕組みをして、俺のことをにらみ付けていた。

「あんた、どんだけノロマなのよ? 私が、呼んだら、餌を求めるハイエナのごとく死ぬ気で急ぎなさいっ」

とりあえず、餌を求めるハイエナのごとくって、そのたとえばわかりづらいつての。

「なんか言った」

「いいえ」

心まで読めるんじゃないか、こいつ。

「それじゃ、とりあえず買って来なさい」

「……はい?」

「だから、そのバカ面はどうにかなんないの? 魔法で少しはましな

顔に……ってそうか」

そういうと、地面を蹴って、にらみつけられる。勝手に「機嫌ななめになられても。」

「あーもつどつでも良いわ。どうせ元がこれだからどつにもならないでしょ、良いから買ってきなさい」

いちいちむかつくが、下手なことと言って、顔を変形されても困るので、ぐっとこらえる。

「……買って来い、って一体何を」

無言。

「おい、だから何を買ってくれば……」

その刹那、するどい閃光が走るように

「ぐはぁっ!?!」

見事な回し蹴りが腹に突き刺さる。

「なっ何故に……!?!」

わけのわからないバイオレンスな攻撃をくらわされた俺は、痛みでうずくまる。

「……ん」

つつむきながら、小さな声で何かくちずさむ。あの馬鹿でかい声はどこにいつてしまったのだろうか？

「あのーよく聞き取れないのですが……」

その瞬間、またもや閃光が

「うおっ!?!?」

さすがに俺の反射神経はそこまで鈍っちゃいない。同じ攻撃を何度も受けるほど俺はマゾヒストではな

「うぐはあっ!?!?」

強烈な蹴りが寸分違わぬ場所にクリーンヒット。わざわざもう一回転してくれるとは、なんともサディスティック。

「……メロンパン」

「は?」

「だから、メロンパンよっ!メロンパンっ!まったくどこまで耳が腐ってればいいわけ?」

今にも高速の蹴りを繰り出しそうなのを察知した俺は、ギリギリ射程距離外にまで距離を置いてから考える。

メロンパン? あの、パン生地の上に甘いビスケット生地をのせて焼くのが特徴の、主に紡錘形のタイプと円形のタイプが有名なあの菓子パンか?

「いや、なんでそんなもの？」

「決まってるでしょ？私が食べたいのよ」

何がどう決まっていたのかどうかはいいとして

「なんで俺が行かなきゃいけないん……」

といい終える前に、いつの間にかサクラの手にはドッチボールで使われるボールくらいの大きさの火の玉が握り締められていた。火の玉が握り締められていた、なんて可笑しい表現だと思うだろうが、本当になんてことのないゴムで出来たボールのように握りしめているのだ。

「だ、か、ら」

そして、当たり前のように

「この私が食べたいからって言うてるでしょうがあああっ！」

「それをドッチボールのように投げつけるのは勘弁してくれええええええっ」

第十三話 『メロンパン』

朝に見た天気予報で確かこんな事を言っていたような気がする。

『今日は曇りのうち雨。所により晴れるところがあるでしょう』と。確かにその通りだよ、ちくしょー。

辺りは梅雨真っ只中の雨天真っ盛りのはずなのに、今俺は不自然に晴れた空の下にいる。

最近の天気予報士はこんな天気まで言い当てるんだから凄い。それかただ単に今朝、テレビで見かけた奴がかなりの腕だったのかもしれない。

そして、そんな空の下で、某ゲームのどうみても変質者にしか見えないだろう、赤い帽子をかぶったひげ面の配管工のおっさんが繰り出すような炎の玉を、今まさに、連発されている。こんなサイケデリックな体験そうそうできたものじゃない。

「待てっ！落ち着け、お前がメロンパンを食べたいのはわかったから」

悲痛な叫びをもらすもお構いなしに、無制限に連発してくる。某ゲームの敵キャラ達の気持ちがあわかった気がする。今度から、全てひと思いに踏んでやることにしよう。

ゴウゴウと唸るような音を立てながら、ひっきりなしに飛んでくる炎の玉を必死にかわし続ける。昔から、ドッチボールをかわすのが何故か得意だった（そしていつの間にか残り一人になる）が、これだけ無制限に連発すれば当たるに決まっている。実際に何度か当たったが、いや、実際には当たるはずだったが、体に触れる瞬間に綺麗に消えていってしまうのだ。まるで、自分の体の回りに密着した薄いバリアが張っているように。だから熱くもなければ、コゲも

しない。どうやら、これが例の『アンチ体質』って奴なんだろう。本当なら死ぬかも知れないような大やけどをするんだろうが、全て打ち消してくれるらしい。

嬉しいんだが嬉しくないんだか、わけのわからないこの感情は一体何なんだろうか。

「お嬢様」

「あん？ 何よ爺、せっかく楽しんでたのに」

「そろそろ本題の方に戻られた方が……」

「ああ、それもそうね、そんなところでうずくまってないで早く買って来なさいよあんた」

どこの口がそんなことを言えるんだろうか？ つい先ほどまで平然と炎の玉を連発でドツギボールをする（悪魔で当てるだけの）なんて凶行を繰り返していたのはどこのどいつだ？ というか、楽しんでる、なんて聞こえたのはどういうことだ？ 不思議を通り越して、もう変態なんだな？

「なんか言った？」

「いいや、何も」

だから、読むなっつての。

「ふああ……あ、爺。私眠くなってきたから、そいつが買ってきたら起こしなさい」

「はい、かしこまりました」

大きなあくびをしたかと思うと、次の瞬間にはサクラの姿は消えていた。どこまで身勝手なやろうなんだ。家に帰ったのか、それともどこか彼女専用の仮眠専用の異空間とかにレポートしたのか、なんて、いくらでも馬鹿げた仮説が生まれてくる。あんな能力があれば、旅行会社は確実に倒産するだろうな……じゃなくて。

「もう、なんでもありだな。はあ……」

大きなため息が出る。最近ため息の数が増えているような気がする。それは単なる気のせいなんかではないのはわかっている。そうじゃなくても、天才馬鹿野郎の松岡のせいで、嫌でも搾り出すように出てくるつてのに、これ以上出せば、命の支障をきたすんじゃないか？　なんてわけのわからないことを考えてしまふのは末期症状かなんかだろうか？

「小澤様、どうかいたしましたか？」

「につこり、と眩しいくらいのさわやか執事スマイルを見せて聞いてくる。」

「どうかいたしましたか、って聞かれりゃ、どうかしてるんだがな」

この現状が、な。

「まあ、いいや。……いや、決してよくはないんだが、これ以上何か言っても変わらないから面倒なだけで、だからといって別に俺は認めたくはないわけで……」

目の前の爺の顔にクエスチョンマークが浮かぶ。そりゃ俺、自身何を言っているのかどうかわからないんだから、他人にわかるはずもない。

「…………お嬢様は」

「え？」

俺が、わけのわからないことをペラペラと口走っていたのに痺れ切らしたのか、爺はにっこりと笑って、

「お嬢様は、心のお優しい方です。そのうち、あなたにもわかる日が来ますよ」

そう言い終えるともう一度、にっこりと笑顔を見せる。

その言葉に頭の前から足のつま先まで衝撃が走らんばかりだったが、その満たされた笑顔を見ていたら、なんだか自分がちっぽけに見えてきて、思い悩んでいたことなんてどうでもよく…………なんてことはない。

「…………とりあえず、いいや。もう考えるのが面倒臭い、とにかく今は自分の身が助かる最善の道を取ることにするよ。これ以上、火の玉漬けになるのはこりこりだからな」

もう、あんな恐怖を（痛くも痒くもないが）味わうのは勘弁してもらいたい。また、夢に出てきそうだ。そんな俺の考えを全て理解したのかどうかはわからないが、爺は何事もないように

「はい、私もそれが一番の選択だと思えますよ」

また、につこりと笑顔になる。はあ……その笑顔は反則だな。

「……で、メロンパンを買いにいけって言ってたけれど、なんでまたメロンパンなんだ？」

「お嬢様はメロンパンが好物なのです」

ストレートにきたなおい。

「……で、なんで俺が買いにいかなきゃならないんだ？」

「それは……推測ですが、なかなか気軽に学校内を歩けないからだと思います」

「気軽に歩けないってのはどういうことなんだ？」

てつきり俺は、買いに行くのが面倒くさいから、とかなんとか言
って自分で買いに行きたくないだけだと思っていたんだが。何かち
やんとした理由でもあるのか？

「小澤様もご存知ではあると思いますが、お嬢様の知名度はこの学
校では、それはそれにも昇るほどのもので、知らぬものは全学
年の生徒、もちろん全教師いなしでしょう。それは、つまり色々
自由が利かなくなるといことなのです。見ての通りお優しい方な
ので、ご自分の時間を割いても周りの方たちに耳を傾けていると
いつの間にか時というのは過ぎていくもので、なかなかこれが
お嬢様の買いに行くという衝動を抑えてしまうというなんと……」

「まてまて、なんとなくわかったが（見ての通り優しいだのなんだ
の言ってるところは省いて）とりあえず、あいつは自分で買いに行

くのが面倒くさいから買いに行きたくないって言いたいんだな？」

「……少し返答に誤りがあると思いますがおおよそは正解だと思います」

なんのひねりなしもにやっぱりそうじゃねーか。というかあんたも「おおよそ正解だと思います」ってなんだ？ もろ正解だろうがこの爺さんもかばうにしたってもう少しまじなかばい方したらどうだ……ってそうじゃない、根本的に違う。

「はあ……もういい、とりあえず面倒だが、買いに行ってやるよ」

重い足取りで入り口に向かう俺に「いつてらっしゃいませ」と機械的な言葉が耳に入る。

「あつ、そういえば」

ふと浮かんだ疑問を口にだす。

「売り切れていた場合はどうすればいいんだ？ というかあそこの食べ物全般、中休みの間にほとんど売り切れているから、多分ない確率の方が高いと思うんだが」

商品のほとんどが、おばちゃんたちの手作りなので数が少ない上、かなりの人気なので売り切れるのはしょうがないことだろう。

「それは……答えかねます」

「何故にっ！？」

絶対に買って来いと？ 買ってこれなければ命の保障はないと、あんたはそう言いたいんだな？ 終始笑顔の爺が、一瞬だけ顔をにごらせたように見えたのは、気のせいであってほしい。そして、やっぱりもう一度聞きたい。ここだけははっきりしておかなくては。

「心のお優しい方」ってのは前言撤回でいいんだよな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1090n/>

俺の世界崩壊の日は

2010年10月11日14時08分発行